

日 本 体 育 学 会

体育心理学専門分科会会報

第10号(通巻第38号)

体育心理学専門分科会

1998年 8 月発行



## 日本体育学会 体育心理学分科会 会則

- 第1条 本会は日本体育学会 体育心理学専門分科会と称する。
- 第2条 本会は体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 研究会の開催
  - (2) 会報の発行
  - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報の収集と紹介
  - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は本会の趣旨に賛同する者で、本会の会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
  - (2) 運営委員 若干名
- 第6条 本会の会長の任期は2年を原則とする。ただし、運営委員は留年を妨げない。
- 第7条 本会の会議は総会と運営委員会とする。
- 第8条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 会長および運営委員の選出
  - (2) 事業報告および収支決算
  - (3) 事業計画および収支予算
  - (4) 会則の改正
  - (5) その他
- 第9条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第10条 会長は運営委員の投票により互選する。会長候補者が過半数に満たない場合は、出席会員の3分の2以上の賛成によって決定される。
- 第11条 会務の執行は、運営委員と協議のうえ事務局が担当する。
- 第12条 本会の経費は会員の会費（年額1000円）、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第13条 本会の会計年度は日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門分科会総会までとする。
- 第14条 本会の事務は事務局で行い、当分の間、筑波大学体育科学系内（〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1, TEL&FAX:0298-53-2686）に置く。  
事務局には幹事（若干名）を置き、任期は4年間とする。

平成7年10月5日施行。

## 体育心理学専門分科会選出の日本体育学会の役員

任 期：平成9年4月1日～平成11年3月31日

理 事：3名

杉原 隆 猪俣公宏 徳永 幹雄

(順不同)

評議員：21名

|        |       |       |       |        |        |
|--------|-------|-------|-------|--------|--------|
| 荒木 雅信  | 石井 源信 | 市村 操一 | 伊藤 政展 | 猪俣 公宏  | 岡沢 祥訓  |
| 岡村 豊太郎 | 加賀 秀夫 | 工藤 孝幾 | 近藤 充夫 | 佐久間 春夫 | 杉原 隆   |
| 調枝 孝治  | 徳永 幹雄 | 中込 四郎 | 橋本 公雄 | 船越 正康  | 藤田 厚   |
| 丹羽 劭昭  | 山本 勝昭 | 落合 優  |       |        | (五十音順) |

なお、上記評議員の先生には、体育心理学専門分科会の運営委員として同期間活動して頂くことになっています。

## はじめに

日本体育学会体育心理学専門分科会  
事務局代表 中込四郎（筑波大学）

大学に所属されている先生方におかれましては、種々の側面から学内の再編に忙しく関わっていることと思います。「なぜ今」と問いかけると、外からの要請だけでなく、各大学そして自分自身の中での必然性も感じられないことはありません。いずれにせよ、この機は私たちを確実に大学そして教育へと引き戻しているようです。

このことと呼応して、本年の学会では、佐久間先生（奈良女子大学）をオーガナイザーに、「大学・大学院における“体育心理学”教育の課題およびネットワーク化」と題してシンポジウムが行われることになっています。この試みは、最新の重要な研究課題について討議するといったこれまでの学会シンポと大きく異なります。当日ご参加いただける先生方には、それぞれの立場から意見を出していただき、具体的な歩みを起こすきっかけとしたいと考えております。

学会誌の編集委員会では、投稿規定や審査規定について検討が重ねられているようです。会員からの投稿促進ならびに審査過程の効率化が課題となっているようです。体育心理学領域関連の研究活動そして成果の公刊がさらに活発になっていくことを願っています。

事務局を担当して2年目が過ぎようとしています。学会本部や学会大会関連の仕事のみの活動で終わってしまったようです。会員の皆さまの協力を得ながら、分科会事務局としての活動を充実していきたいと願っています。

平成10年 8月17日

# 目 次

|                                           |                      |               |
|-------------------------------------------|----------------------|---------------|
| はじめに                                      | 中込四郎 (筑波大学)          |               |
| I. 特別寄稿                                   |                      |               |
| 理論をフィールドに、フィールドから理論を                      | 岡澤祥訓 (奈良教育大学)        | 1             |
| パソコンが変えた研究手法                              | 佐久間春夫 (奈良女子大学)       | 4             |
| 北米スポーツ・運動心理学会 (NASPSPA) に参加して             | 関矢寛史 (広島大学総合科学部)     | 6             |
| II. 日本体育学会第48回大会関連                        |                      | 9             |
| 1. キーノート・レクチャー                            |                      |               |
| テーマ 「随意運動に先行する脳の緩電位変動と心理的要因」              |                      |               |
| 司 会：佐久間春夫 (奈良女子大学)                        |                      |               |
| 演 者：正木宏明 (早稲田大学人間科学部)                     |                      |               |
| ＜キーノート・レクチャー傍聴記＞                          |                      |               |
| キーノート・レクチャー傍聴記                            | 平田智秋 (筑波大学体育科学研究科)   | 12            |
| キーノート・レクチャー傍聴記                            | 菟 信義 (弘前大学)          | 13            |
| 2. シンポジウム                                 |                      | 15            |
| テーマ 「運動部活動における体育心理学からの諸問題及び研究課題」          |                      |               |
| 司 会：中込四郎 (筑波大学)                           |                      | 15            |
| 演 者：皆木 香 (新潟市立小新中学校) 「運動部活動の指導を通しての問題・課題」 |                      | 17            |
| 桂 和仁 (武蔵丘短期大学)                            |                      |               |
| 阿江美恵子 (東京女子体育大学) 「運動部活動と体罰－指導行動にみられる      |                      |               |
| 心理学的問題－」                                  |                      | 19            |
| ＜シンポジウム傍聴記＞                               |                      |               |
| シンポジウムを傍聴して                               | 伊藤豊彦 (島根大学)          | 21            |
| シンポジウム傍聴記                                 | 竹之内隆志 (名古屋大学)        | 23            |
| 3. 一般研究発表 (座長報告)                          |                      |               |
| ＜口頭発表＞                                    |                      | 25            |
| 調枝孝治 (広島大学)                               | 吉川政夫 (東海大学)          | 正木宏明 (早稲田大学)  |
| 杉山佳生 (鹿屋体育大学)                             | 滝 省治 (甲子園大学)         | 森 司朗 (東京学芸大学) |
| 土屋裕陸 (大阪体育大学)                             | 丹羽勸昭 (聖母被昇天学院女子短期大学) |               |
| 吉田 茂 (筑波大学)                               |                      |               |
| ＜ポスター発表＞                                  |                      | 38            |
| 工藤孝幾 (福島大学教育学部)                           | 堀野博幸 (防衛大学校)         | 竹中晃二 (早稲田大学)  |
| 楠本恭久 (日本体育大学)                             | 三木ひろみ (筑波大学)         |               |



|                   |                |
|-------------------|----------------|
| ＜日本体育学会参加記＞       | 45             |
| 日本体育学会第48回大会に参加して | 杉山哲司（山梨英和短期大学） |
| 体育学会に参加して         | 高橋孝徳（順天堂大学大学院） |

### Ⅲ. 研究室および研究会活動の紹介

#### 1. 研究室めぐり（その5）

順天堂大学スポーツ健康科学部心理学研究室

星野公夫・中島宣行（順天堂大学） 49

#### 2. 研究会紹介 52

阿江美恵子（スポーツ社会心理学研究会）

船越正康（大阪心理技術研究会）

星野公夫（スポーツ動作法研究会）

麓 信義（運動学習研究会）

中込四郎（臨床スポーツ心理学会）

高妻容一（メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学会）

### Ⅳ. 日本体育学会第49回大会および関連学会の案内

#### 1. 日本体育学会第49回大会 59

#### 2. キーノート・レクチャー、シンポジウム要旨 60

##### 1) キーノート・レクチャー

テーマ：今、求められる健康スポーツの心理学的意義

司会：中込四郎（筑波大学）

演者：竹中晃二（早稲田大学）

##### 2) シンポジウム

テーマ：大学・大学院における「体育心理学」教育の課題およびネットワーク化

司会：佐久間春夫（奈良女子大学）

演者：吉田 茂（筑波大学）

近藤明彦（慶応義塾大学）

荒木雅信（大阪体育大学）

石井源信（東京工業大学）

### Ⅴ. 事務局報告

#### 総会式次第 67

#### 1. 報告 68

1) 日本体育学会体育心理学科会関連 68

2) 体育心理学専門分科会会報の発行 68

3) その他事務局報告 69

4) 速報 70

#### 2. 議題 71

1) 平成10年度の事業計画について 71

(1) 日本体育学会第49回大会関係 71

(2) 体育心理学専門分科会会報第9号（通巻37号）の発行について 71

2) 平成9年度決算および平成10年度予算案について 71

3) その他 71

3. 平成10年度日本体育学会体育心理専門分科会の活動について 72

4. 専門分科会の会員が中心となって活動している研究会（グループ）の紹介 74

## I. 特別寄稿





## 特別寄稿

# 理論をフィールドに，フィールドから理論を

岡澤 祥訓（奈良教育大）

## I. はじめに

体育学部 of 体育心理学の研究室に11年勤務した後、保健体育科教育学の研究室に勤務して11年の年月が過ぎました。初期の研究は、パーソナリティが運動参加にどのような影響を与えるのかという観点から行っていました。この頃の私は、体育やスポーツ等の運動が性格形成に及ぼす影響よりも、パーソナリティが運動参加の方法を規定するというところをアイゼンクの性格理論を基に検証し、体育心理学における従来のパーソナリティ研究（運動がパーソナリティに与える影響に関する研究）を批判することで満足していました。しかし、指導者と話しているとより具体的なレベルの情報を要求されるし、そのような具体的なレベルの行動の違いになると有意差を検出することができずに悩んでいました。その頃は、体育学部の学生を対象に調査や実験を行っていました。有意差が検出できないのは競技レベルが低いからで、トップレベルの選手では有意差が検出できるだろうと考えていたところ、同じ大学に勤務する油座先生が卓球協会のスポーツ医科学委員会の委員長をしていることを知り、ナショナルチームのデータをとらせてくださいとお願いしたところ、サポートのために使える研究ならばいいですよと許

可していただきました。これがフィールド出るきっかけでした。この時、指導者から要求されたことは、だからどうすれば良いのかということであった。心理テストの結果、ある選手はこのような問題点を持っている可能性があることは分かっていても、どのようにすれば良いのかが分からなければ、その選手を試合に使わないという解決方法しがなく、本当にそれでよいのかということが問題になった。スポーツ心理学は問題点やなぜそうなるのかを解説してくれるが、解決策を提示できないという点を指摘され、あなた方は研究を行うために来ているのであって、選手や指導者のサポートに来ているわけではないということを指摘された。私自身の勉強不足がスポーツ心理学全体への不信感を抱かせてしまったことにショックを受けました。このような状態で退散してしまったのは、スポーツ心理学は役に立たないということを示すために卓球のナショナルチームに行ったようなものである。何とかしなければならぬという焦りだけが先行した。しかし、冷静に考えてみると、今までは選手や指導者が何に対して困っているのかを無視して、私の興味、関心に従って、データを収集し問題点を指導者や選手に伝えるという活動をしていた。その問題はその競技を行う

上で重要な問題なのか、それとも無視してよい問題なのかを判断する知識や情報も無しに、自分はスポーツ心理学を学んできたという自信に支えられて土足で踏み込んでいたのだと思う。そこで、何が問題であるのかを指導者や選手に聞くことにした。しかし、指導者や選手も心理面に関しては重要であることを認めていても問題意識は明確でないように感じた。選手や指導者が指摘した問題は試合であがってしまっていて実力が発揮できない。集中が切れてしまう等の一般的な内容であった。この頃に中京女子大学に山本祐二（現名古屋大学）が着任し、二人で相談した結果、吉澤洋二（名古屋経済大学）、米川直樹（三重大学）、鶴原清志（三重大学）、鈴木荘（岐阜大学）の6人でプロジェクトを組んでサポートすることを決定した。6人で合宿に行く前に、面接のテクニックを臨床心理学を学んでいた鈴木氏にトレーニングしてもらい、どのようなサポートが可能かを話し合った。合宿では心理テストを実施し、その結果を基に選手と面接を行った。選手との面接の後、指導者との話し合いが行われ、一人一人の選手にどのように接するべきかを検討した。指導者や選手の要求をとりいれてリラクセーションや集中力のトレーニングをメンタルマネジメントプロジェクトが作成したオーディオテープを用いて行った。このテープを用いたトレーニングは合宿時に説明を行い、実際は自宅で実施してもらった。実際行ったのは僅かの選手だけであったようである。ソウルオリンピック終了後に選手にインタビューを行った結果では、「一番効果があったのは面接であった」と殆どの選手が回答した。私自身にとって、この回答は不思議であった。メンタルトレーニングを行うための情報収集のために行っていた面接が一番効果があるとは考えられなかったからである。

## Ⅱ．フィールドに理論を

なぜ、面接が効果があったと選手が判断したのかを考えてみると、面接で選手は多くの問題点を話していました。その問題に対して我々は、従来のスポーツ心理学の研究結果や理論を基にアドバイスしていたと思います。なぜ、そのようなことが問題になるのか、そのことに対してはどのように考え、どのように対処すべきなのかを説明することは、そのような状態になるのは自分だけではないこと、問題が明らかになれば解決の方法は必ずあることを示せたと思います。心理学の研究は、選手が読んで問題とする内容に直接解答を導くことは難しいけれども、心理学を少しでも学んだ者にとっては、問題の解答を導くことの参考になる研究は多くある。しかしこの解答はあくまでも、こうだろうと言う予測にすぎないことも事実である。選手や指導者が問題であるという事柄に対する解答を導く研究、すなわち、理論をフィールドにおいて検証する研究がもっと多くあっても良いと思う。このような研究が少ない理由は二つあり、一つはフィールドは実験室ではないから、条件を統制することが困難であり、あえてそれを行おうとした場合には、研究のための研究を行っていると思われることや、従属変数の数量化が難しいという問題である。二つ目の問題は理論を作るためのメカニズム研究は実験計画が立てやすく、学会誌などに受け入れられ易いと現実がある。誰かの研究結果を基にフィールドに役立つ方法を考え、それが役立つことを証明しても、研究計画や従属変数に問題があることを指摘される、また、その研究にかかる時間は想像を絶するほど多くかかってしまうということである。しかし、スポーツや体育の指導現場では、現場に役立つ、指導者が理解できる理論を必要としていることも事実です。例えばリラクセーションが必要である



という研究結果から指導者や選手はどのようにすれば良いのかを理解することは困難である。指導にメンタルトレーニングを取り入れたいと思っている指導者がいても、どのようにすればよいのか分からないというのが現実であろう。その競技や選手に合ったメンタルトレーニングプログラムを作成し問題がないかどうかをチェックしながら実施し、そのプログラムを修正していくという研究活動がなければ、現在までに多く行われてきた研究成果を指導現場で用いることは難しい。現在の指導者や選手はスポーツ科学の成果を取り入れることの必要性は理解していると思う。現在はまさに「フィールドに理論を」の時代である。そのことを実現するためにはフィールドに活動の基盤を置く研究者が一人でも多く育って欲しいものである。

### Ⅲ. フィールドから理論を

フィールドに役立つ理論は必ず実験室からでてくるというわけではない。指導者は何時も、研究結果に基づいて指導を行っているわけではない。指導者は何度も試行錯誤を繰り返しながら彼らの指導法を確立してきている。この経験を基にして明らかにされた内容を実験計画法に従って証明することは困難であろうと思われるが、多くの真実を含んでいる可能性は高い。この経験に基づいた真実を理論化する方法があれば、スポーツ、体育心理学は急速に発展すると思われる。しかし、数量化することが求められる研究方法を適応しなければ、理論化ができないということであれば、フィールドから理論を求めることは困難であると考えられる。この問題を解決する方法は、近年欧

米で盛んに使用されるようになった質的研究法、すなわち、インタビューを用いた研究を行うことであると思われる。インタビューは簡単に行えると思われるかもしれないが、自分の都合のよい結論を誘導する可能性が高いことや、分析の方法等困難な点は多くある。しかし、この方法に関しては近年多くの情報を得ることができるようになった。また、心理学には臨床心理学という領域が確立されており、この臨床心理学では昔からこのような研究方法を採用してきたという経緯がある。優れた指導者や選手から学ぶこと、すなわち優れた指導者や選手の経験を理論化することは可能である。このことを行えるのもフィールドに基盤を置く研究者である。実験室を飛び出てフィールドで活躍するスポーツ心理学者や体育心理学者が求められている時代である。

### Ⅳ. おわりに

理論をフィールドに役立て、フィールドから理論を求めることの必要性を否定する人はいないと思う。しかし、そのようなことを真剣に行う人を研究者と認めないという人は多くいると思われる。なぜなら、いくら頑張っても研究計画法上に問題を残すからである。従来の行動科学のみが研究方法であるという立場の人々からみれば、物語のような話に聞こえるのであろう。体育学会も来年50回の記念大会を迎えようとしている。新しい時代の体育心理学、スポーツ心理学に「理論をフィールドに」、「フィールドから理論」という立場を位置づけることが必要であると感じているのは私だけではないと思う。

## パソコンが変えた研究手法

佐久間春夫（奈良女子大学）

今日、パソコンというといふインターネット、マルチメディアを利用するための道具と連想されるほど、インターネット、マルチメディアという言葉は一般的となり、パソコン関連雑誌だけでなく、一般週刊誌や新聞紙上でも毎日のように使われている。それは、文字だけでなく画像、映像、音声などの複数のメディア（マルチメディア）を同時に利用し、楽しむことができる新しい情報ツールの出現と期待される面が非常に大きいからであろう。ここでは、筆者の経験からパソコンとインターネットが持つ“便利さ”について述べてみたい。

パソコンやインターネットの普及の背景としては、(1) 社会からの必要性、(2) コンテンツの示す多様性と高い専門性（娯楽性の高いものから学術性の高いものまで）、などが考えられる。

どのような分野でも言えることであると思われるが、“必要性こそが生みの親”といわれるように、“必要性”こそが新たな発明、発見を生み出すことにつながる。時には社会といった時代の流れをも変える力を持つこともある。

筆者の院生時代だから1970年代後半頃と思うが、マイクロコンピュータの出現は、これまでの電子計算機のイメージを一変させるような出来事だった。それまでは、空調の利いた専用の部屋で特定の人しか直接触れることができず、さらに筆者らのような一般ユーザは、バッチ処理（batch

processing）を利用することしかできず、実験システムに組み入れてリアルタイム処理（real time processing）を行うといったようなことは考えられなかった。

研究手法上、脳波、筋電図、心電図などの生体信号を扱う場合、これらアナログ信号を定性的に比較するか、記録用紙などに描かれたチャートから“マニュアル”で定規やノギスなどでデジタル化してから後、パンチカードに穿孔し計算機で数理解析をせざるをえなかった。時間のかかる割には処理できるデータに限界があった。effort/performanceといった点から見ると、今からは考えられないような割合（比）であったと思う。

当時、シグナル・プロセッサといったアナログ・デジタル信号変換処理機がなかったわけではないが、非常に高額で大学の研究費や科研費で購入できるようなものではなかった。

「能力やアイデアがなくて実験・研究ができない」分には諦めもつくが、「お金がないからできない」ことほど悔しいものはない。“1人（省力化）で限られたお金で実験・研究するには？”これが筆者の原点であった。比較的廉価で自由度の高いパソコンの購入とプログラミング（BASICとアセンブラ言語）の勉強、さらに電気の勉強とでスタートした。その結果、完成させた脳波を中心とした生体信号の解析システム（NECPC9801F2をマスター・コンピュータとして実験のプロトコル

を管理、同VMをスレーブ・コンピュータとしてアナログ信号の取り込みとデジタル信号へ変換と解析)は、16年間大したトラブルもなく都立大→国士館→奈良女と場所は変わっても現役で働いている。このような発想は、1980年から81年にかけてのUCSF留学で、Joe Kamiya博士のバイオフィードバック実験施設での経験が大きかった。

1回のCNV(随伴性陰性変動)実験では、フロッピー・ベースで200枚、200MB以上の記憶容量を必要とするために、今日では廉価なギガ単位記憶媒体があるが、フロッピー・ディスクの節約、実験データを安全に一括管理できる場所の確保といったことで、情報センターの大型計算機に着目した。学内LANを使って実験データを実験室のパソコンから転送する方式に切り替えた。このようなシステムの完成がなかったなら、おそらく学位取得もずっと先のことであったか、あるいは不可能であったかもしれない。まさに、パソコンのお陰であり、パソコンと共に歩んだ日々であったと思う。

奈良女へ来てから、実験室と研究室が離れているため、一昨年から、Windows95のネットワーク機能を利用して、実験室のデータファイルと研究室のパソコンのデータファイルを共有できるようにしている。さらに、PPP(Point-To-Point Protocol)ダイヤルアップ接続により、自宅のパソコンからも随時利用できるようにしている。しかし、このような実験システム環境の整備が、実験研究のパフォーマンスにつながらないところが筆者の一番の問題点であると自覚はしているのだが・・・

インターネットやマルチメディアのコンテンツのように、デジタル化された情報は、従来のメディアからのようなアナログ情報に比較して、伝達の正確さ、伝送の速さ、処理の容易さ、保存の

容易さ、検索の速さと容易さ、保管場所の少なさなど、多くの点で優れている。ここでは、これらの点を利用したインターネットについて見てみたい。

インターネットは情報の宝庫といわれているように、最近では図書館に行くよりもインターネットで情報収集の機会がずっと多くなった。特に重宝しているのが、米国国立医学図書館の無料のMedline(医学、自然科学文献データベース)  
<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/PubMed/>サービスである。ちなみに、“sport or exercise and anxiety”と検索用語を入力してみたら、6,889件の著者名、論文題目、出典名などが表示された。もちろんアブストラクトも見ることができる。便利な点は、[See Related Articles]といった膨大な数の関連文献をも読むことができる点である。日本の国会図書館の場合を考えたら彼我の差を感じさせられる。

もちろんスポーツ心理学に関する情報源も豊富である。検索エンジン、例えばYahoo(<http://www.yahoo.com/>)で“sport psychology”と入力したら、29のサイトが表示された。その一例として、学会案内(アメリカ心理学会(APA)のディビジョン47, NASPSPA, AAASP)や大学案内、またスポーツ心理学をビジネスとしている人、例えば、Nideffer, R.E. (<http://www.enhanced-performance.com/>)や、Mind Plus Muscle Institute for Applied Sports Psychologyを主宰しているBowman, J. (<http://www.mindplusmuscle.com/>)に関する情報がある。さらに、各種競技(91競技)を中心としたスポーツ心理学などについてはSportQuest(<http://www.sportquest.com/sportdir.shtml>)がある。

SportQuestの中のTrack and Field / Athleticsを例に取り上げてみると、All Topics(184), Decathlon(5), Marathon(53), Pole Vault(10), Running(86),

Throwing Sport (6), Track (64)と種目別にカッコの中にサイト数を示しながら表示される。この中で一番多いAll Topicsを選んでみた。Associations International (3), Associations-National (5), Associations State and Provincial (4), Biography (23), Biomechanics (1), Clubs and Teams (11), Coaching (1), Computer Software (2), Countries and Regions (6), Directory (2), Disabled (4), Drugs and Doping (1), Equipment (1), Equipment-Retailing (1), Events (1), Events-International(8), Events-National (7), Events-Olympic Games (9), General (3), History (1), Injury (3), Magazines and E-zines (4), Masters Competition (1), Medicine (3), News (3), News Groups / Listservs Directories (2), Nutrition (1), Psychology (1), Statistics (1), Statistics-Ranking (4), Statistics-Record (5), Statistics-Results (6), Training (9), Universities and Colleges (36), Women (10), Youth (1) といったよう

に、アルファベット順に項目（ホームページ）が整理されている。この項目の中から、“Psychology”を選ぶとコロラド大学の Collins, J. によるスポーツ心理や心理学関連の学会の一覧(<http://spot.colorado.edu/~collinsj/>) やそれぞれのニュースを知ることができる。

スポーツ心理学の講義内容などの紹介、論文や実験データの紹介、歴史等々の多くの情報が公開されているのを見るにつけ、自分の非力さを感じさせられる。と同時に、インターネットといった技術的な課題にばかり気を取られがちであるが、その背後にあるアメリカ的な価値観に脱帽することもしばしである。負けずに、近い内に体育・スポーツ心理学関連のデータベースを完成させたいと考えている。関心のある方は、[sakum@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:sakum@cc.nara-wu.ac.jp)まで是非を連絡をいただきたい。

## 北米スポーツ・運動心理学会 (NASPSPA) に参加して

関矢寛史（広島大学総合科学部）

去る6月11日から14日まで、アメリカ合衆国イリノイ州の大都市シカゴから車で1時間のところにある Pheasant Run Resort & Convention Center で北米スポーツ・運動心理学会（North American Society for Psychology of Sport and Physical Activity）の annual conferenceが開催されました。この学会は、「Sport & Exercise Psychology」、「Motor Learning & Control」、「Motor Development」の3領域に分かれています。それぞれ38, 33, 16演題の口頭発表

が行われました。ポスター発表は各領域に分けられていませんでしたが、計142の発表が行われました。その他にも、計13のキーノートレクチャーやシンポジウムが行われ、活発な議論が展開されました。

研究者や大学院生は、アメリカやカナダを中心に世界中から集まりましたが、日本からも東京大学立大の今中先生と愛知教育大の筒井先生と私の3人が参加しました。また、ペンシルベニア州立大の



Ph.Dコース1年目の勝又宏（かつまたひろむ）君にも会うことができました。彼は、ダイナミカル・システム・アプローチの研究者であるDr.Sternad（写真）を指導教官とし、ペンシルベニア州立大に現在集まっている優秀な指導陣の講義を受けたり研究したりと、大変うらやましい環境に身を置いています。

私は主に「Motor Learning & Control」の発表を見て回りましたが、ダイナミカル・システム・アプローチと情報处理的アプローチのどちらにおいても活発な研究が行われていると感じました。そして、これらの研究パラダイムの対局に立った議論よりは、折衷案を求める研究パラダイムの隆盛を感じました。たとえばダイナミカル・システム・アプローチのシンポジウムでは、両手協応課題の学習に注意、意図、教示内容などの認知的要因が与える影響に関して、フランス、イギリス、オーストラリアなどの研究者が発表を行いました。カナダのDr. Leeらの研究グループも含め、ア

メリカよりむしろ世界の他の国々で、このような考え方で研究が進められるようになってきていると思います。

また、若手研究者奨励賞には、オーストラリアのDr. Carsonが選ばれ、コーディネーションについての講演を行いました。この講演を聴きに行かれた今中先生は、素晴らしい内容だったと言われていましたが、残念ながら筒井先生と私は時差ぼけの為、ホテルの部屋で寝過ごしてしまいました。ところで来年は、フロリダで学会が開かれる予定ですが、私は来年も是非参加しようと考えています。数年前にもフロリダのビーチサイドに建つホテルで開かれた学会に参加しましたが、発表の合間に泳いだり日光浴をしたり、夜はビーチでのパーティーに参加したりと、とても楽しい思い出が残っています。もちろん発表はしっかり聴いてこようと思いますが、日本からも多くの研究者や大学院生が参加されることを期待しています。みなさん一緒にNASPSPAに行きましょう。



Dr. Sternadを囲んでの会場風景

## Ⅱ．日本体育学会第48回大会関連

## キーノート・レクチャー

### テーマ「随意運動に先行する脳の緩電位変動と心理的要因」

司会 佐久間春夫（奈良女子大学）

演者 正木 宏明（早稲田大学人間科学部）

### 随意運動に先行する脳の緩電位変動と心理的要因

演者 正木 宏明（早稲田大学人間科学部・現：日本学術振興会）

#### 1. はじめに

本稿は日本体育学会第48回大会体育心理学分科会におけるキーノートレクチャーの発表要旨である。ここでは、随意運動に先行して出現する準備電位 (readiness potential; RP)<sup>1,2)</sup>が、運動直前の脳内準備過程を知る有効な手段となり得ることを述べさせていただいた。

RPは長時定数で記録した脳波を、随意運動の開始時点に揃えて加算平均することで観察される。RPは前期成分BPと後期成分NS'から構成され<sup>3)</sup>、運動速度や力量の他に、注意、構え、動機づけなど心理要因の効果によって変化することが報告されてきた。しかし心理要因の効果を報告した研究については、1) 運動速度、力量などの要因と、心理要因の混交した研究が多い。2) スキルを要する課題を用いた研究が少ない。3) RPを前期成分BPと後期成分NS'に分離して、それぞれの振る舞いについて検討したものが少ない、といった問題点を指摘することができる。著者はこれまで、運動速度や力量の統制が可能であると同時に、スキルを要す

る課題を工夫することで、RPに及ぼす心理要因の効果を検討した。以下にその概要を示した。

#### 2. 課題遂行に伴う注意とRP

まず、右手第2指によって引き金を牽引する運動課題を用いて、単純牽引を繰り返す条件と、牽引によって標的強度値を出力する条件でRPを比較した<sup>3)</sup>。その結果、平均牽引強度、速度ともに条件間に差はなかったが、RPについては標的強度値の出力という目的性付加に伴い、後期成分NS'に特異的な振幅増大が認められた。標的強度値を出力する課題では、筋制御の成功・失敗がパフォーマンス結果を左右するため、被験者の注意は当該運動直前で高まる。この運動直前における注意の高まりによってNS'が特異的に増大したものと解釈される。同様の結果は、打鍵運動課題で課題難度を操作した実験でも認められた<sup>4)</sup>。

次に、運動プログラムに適用するパラメータに修正が要求される場合に生じるRPの変化について検討した<sup>5)</sup>。課題は引き金の牽引による標的強度値出力課題であり、同一の標的強度値を繰り返し出

力する単一標的條件と、3種類の標的強度値を交互に出力する複数標的條件の2条件を設定し、両条件に共通する標的強度値の出力試行を解析した。その結果、複数標的條件でNS'の特異的増大が認められた。このNS'増大は、試行毎に修正される強度パラメータ適用に伴い、運動直前で高まった注意起源によるものと考えられる。

いずれの実験の結果も、NS'増大の原因を課題遂行直前に高まる注意に求めることができる。またこれらの結果は、心理要因の効果によって、NS'がBPとは独立して変化し得ることを示唆している。



演者の正木宏明氏

### 3. 運動学習に伴う変化

従来のRP研究では、運動学習過程におけるRPの変化を調べたものはほとんどみられない。そこで標的強度値出力課題を反復練習した場合、RPにどのような変化が生じるかについて検討した<sup>2)</sup>。被験者は連続5日間にわたって課題を反復練習した。その結果、パフォーマンスは反復練習とともに向上し、特に第1日目から第2日目にかけての向上が顕著であった。一方RPについては、5日間の練

習期間中、振幅に差はなかったものの、RPの立ち上がり時点は反復練習に伴いより早期に移行した。この結果は、反復練習に伴って運動準備が早くから行われるようになったことを示しており、RPの早期移行は運動学習初期に特徴的な現象であることが示唆された。

### 4. まとめ

課題遂行直前で高まる注意によってRPの後期成分NS'が特異的に増大した結果は、NS'を情報処理過程に対応づけ得ることを示唆している。一方BPについては、その広汎な頭皮上分布と比較的長い持続時間から、運動準備に関連した非特異的な皮質活動を反映する成分と捉えられる。

本稿で述べた実験結果は、運動直前の準備状態を知るうえでRPが有効な手段となり得ることを示している。また、運動技能の習熟レベルを運動準備過程の視点から評価することも可能である。さらに非侵襲的に記録されることから、スポーツ領域での応用も期待される。

最後に、発表の機会を与えて下さり、また当日多くのご配慮を下さった日本体育学会体育心理学専門分科会事務局の諸氏に深謝いたします。

### 引用文献

- 1) Kornhuber, H.H., & Deecke, L. (1965) Hirnpotentialänderungen bei Willkürbewegungen und Passiven Bewegungen des Menschen: Bereitschaftspotential und reafferente Potentiale. *Pflügers Archiv für die gesamte Physiologie des Menschen und der Tiere*. 248: 1-17.
- 2) Masaki, H., & Yamazaki, K. (1995) Movement-related cortical potential during skill acquisition. In T. Kikuchi, H. Sakuma, I. Saito & K. Tsuboi (Eds.), *Biobehavioral Self-Regulation Eastern and Western*



Perspectives. Springer-Verlag Tokyo. pp. 674-678.

3) 正木宏明・高澤則美・山崎勝男 (1994) 準備電位に及ぼす運動目的性の効果 生理心理学と精神生理学. 12: 73-83.

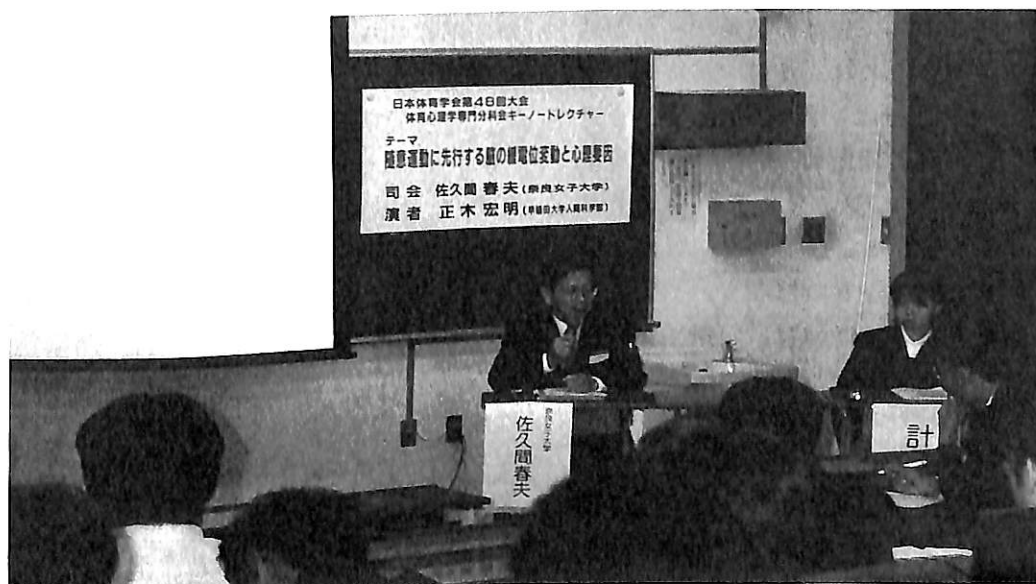
4) 正木宏明・高澤則美・山崎勝男 (1996) 打鍵運動時の課題難度が準備電位に及ぼす効果 脳波と筋電図. 24: 205-212.

5) 正木宏明・高澤則美・山崎勝男 (1997) 引き金の牽引運動時におけるパラメータ修正過程が準備電位に及ぼす効果 脳波と筋電図. 25: 18-24.

6) Shibasaki, H., Barrett, G., Halliday, E., & Halliday, A.M. (1980) Components of the movement-

related cortical potential and their scalp topography. Electroencephalography and Clinical Neurophysiology. 49: 213-226.

7) Vaughan, Jr. H.G. Costa, L.D., Gilden, L., & Schimmel, H. (1965) Identification of sensory and motor components of cerebral activity in simple reactiontime tasks. Proceeding of the 73 rd Convention of American Psychological Association. 1: 179-180.



司会の佐久間春夫氏

## <キーノート・レクチャー傍聴記>

### キーノート・レクチャー傍聴記

平田 智秋（筑波大学体育科学研究科）

傍聴記を書けるほど、脳波の研究に精通しているわけではない。しかし“書くのだ”と決まった時、私の運動準備電位 BPは立ち上がった。当日、正木先生のお話が進むにつれ、さまざまな考えが広がり、後期陰性成分NS'の振幅もかなり増大した。加算平均を取ったわけではないが、これを書くための準備電位はこの程度である。その上での感想だとお察し下さい。

ほぼ満員の会場で静かに始まったレクチャーでは、先行研究の概観の後、先生の実験データが紹介された。興味を引いたのは、注意・多様性・学習などに対して、BPとNS'とが異なる振るまいを見せる点である。BPは運動開始前、約2sから発現する成分だが、運動学習に伴い立ち上がり及早まる。学習によって大まかな運動プログラムが、予測的に選択されるようになるのだろう。一方、課題への注意の高まりや多様性練習は、運動遂行直前の脳波成分であるNS'の振幅を増大させる。注意深く運動強度を調節したり、強度パラメータを選択するとき、運動の構え全体が変わるのでなく、運動直前の微調整だけが変化する。ここで運動前の準備電位と、運動遂行中の制御とに共通する原則が思い浮かぶ。それは“はじめ大まか、後で微調整”である。準備電位のBPに反映される全般的な運動の表現が、学習によって脳に形成され、運動パラメータの意図的な調整は続くNS'の振幅に反映される。運動制御も初期の大まかな制御と、そ

の後の微細な修正をする制御とがある。“はじめ大まか、後で微調整”は脳に特異で、脳が得意なアルゴリズムだろうか。

妄想はさらに膨らんだ。BPなどの準備電位が運動遂行2sから立ち上がるのなら、“この運動をするぞ”と意識できるのはいつ頃だろうか。よくスポーツ場面で“とっさに身体が動きました”などと聞くと、その場合、身体や脳はとっさの運動に対する“下ごしらえ”を予めしているのだろうか。下ごしらえを意識できないだけか？この過程は脳波で計測可能だろうか。とっさの動作はトレーニングできるのだろうか...

レクチャー後半には偏側性準備電位 (LRP) の話が出た。NS'は左右の脳半球で分布に差があり、“刺激の評価系と、反応の賦活系とが、脳では並列に処理されている”そうだと。これは最近よく言われている、脳のモジュール性と階層性を連想させる。モジュールに作業を分配すれば並列処理は可能になるし、並列での処理まとめ、反応をトリガー・遂行するには階層構造が必要になる。微弱的な電気現象である脳波の解析から、LRPなどの指標ができ、脳内処理の構造を推測していく過程には興奮する。そうすると脳波について、基本的なことも知りたくなる。例えば、脳波の発生機序である。Czなどの各電極位置で得られる脳波は、どの脳部位の電気活動を反映しているのか（脳波の震源地）、脳波の振幅は神経活動の量と対応して

いるのか、など。また脳波の個人差も気になる。運動学習に色々な“至り方”があるように、学習に伴う脳波の変化に個人差はあるのだろうか。

PETやfMRIなど最新の測定機器を利用したアプローチが隆盛ではあるが、脳波は今でも有効な生理指標の一つだと思う。特に実験データから、脳

内処理についてのモデルが提示されるとワクワクする。精緻なモデルには、スポーツ場面に応用可能な知見があると期待するからだ。自分もそういった研究をしよう、と襟を正すと同時に、今後の知見が楽しみになる。

## キーノート・レクチャー傍聴記

麓 信義（弘前大学）

正木氏の暖電位変動に関する講演を聞いた。懐かしく思い出すのは、もう20年以上も前の大学4年生か大学院のはじめの頃のことである。私は、恩師である東大の宮下教授（今年春退官、当時は助教授）からの文献リストを渡され、これが本当かどうか医学部図書館で調べて来い、と言われた。おそらく、体育学研究の審査論文の文献リストではなかったかと思っているが、それをもって図書館で文献の現物に当たったところ、題名のスペルやページの表記にかなりのミスがあることがわかり、それらを訂正するとともに、確か1968年のDeekeの論文だったと思うが、それをコピーしてきて、緩徐な陰性動揺について抄読会で発表した記憶がある。宮下氏は、いつもの調子で「へー」と言って聞いていたが、彼が生理学を専門としていることから考えると、この種の研究がはじめは生理学の研究者によって研究され、その後、心理学者も巻き込んだ一大分野に成長したことを物語っていると思われる。運動生理学専攻の先輩が多くいる中で、唯一、心理学に興味のあった私に依頼したこと自体、彼がこの分野の性格を理解していたことを示すかもしれない。

ところで、随意運動の発揮に時間的に先行する陰性波は、BP, NS', PMP, MPとあり、前二者を準備電位と、正木氏は考えているらしい。彼は、準備電位の振幅の変動の原因追求が難しいことを指摘しながらも、やや複雑な作業課題の実験から、NS'を心理的要因と考える説を発表した。また、これまでの多くの実験条件には心理的要因と物理的要因とが混在しており、それらを区別するための厳密な実験設定が重要なことも併せて指摘した。

フロアーからは、Arousalの要因で天井効果が出て来るのではないかというような生理学的測定の問題点の指摘や、物理的要因と言っても力変化の他にスピードの変化等も考えられるという指摘がなされ、この種の実験には、実際のデータをとる難しさだけではなく、解釈の難しさもあるのだと感じ、こんな難しい分野に首を突っ込まなくてよかったと安堵したものである。この時、私も「物理的要因と言っても、物理的要因（条件）の変化（たとえば、2倍の力発揮）が直接脳波に影響するのではなく、物理的变化を達成するための神経系の働きの変化が陰性波に影響すると考える方が、建設的な見通しがつけられるのではないか」とい

う意味の発言をしたが、心理的要因が神経系の活動を変えるという論法は、デカルト的二元論との

関係でも、気をつけて使う必要があるのではないかと感じた。



キーノートレクチャー会場

## シンポジウム

### テーマ「運動部活動における体育心理学領域からの諸問題 及び研究課題」

司会 中込四郎（筑波大学）

演者 皆木 香（新潟市立小新中学校）「運動部活動の指導を通しての問題・課題」

桂 和仁（武蔵丘短期大学）

阿江美恵子（東京女子体育大学）「運動部活動と体罰

—指導行動にみられる心理学的問題—」

## シンポジウムを振り返って

司会 中込 四郎（筑波大学）

今回のテーマ設定にあたっては、われわれの専門分科会において比較的共通性が高く、今日的な課題であることを考慮し、「運動部活動」の問題を取り上げることになった。体育関連の雑誌で特集されたり、偶然、本年度の学会においては、体育原理、体育経営管理の2つの専門分科会でもこのテーマに基づき討議が行われたようである。

もちろん、体育心理学領域で運動部活動の問題がこれまで扱われてこなかったというわけではなく、むしろ研究の多くは、部活動場面に関わってきた。しかし、「部活動を行っている生徒・学生を研究対象とすることは多いが、部活動がどうあるべきかといった視点を前面に出して研究に取り組んだものが少なかった」と、個人的な感想を持

ち、司会者はシンポジウムに臨んだ。

演者の一人である皆木先生からは、中学生の部活指導の現場から話題提供をしていただいた。部活動への生徒の参加に対する保護者や教師の影響、生徒の反応による教師の指導意欲への影響、生徒間での影響、などを具体的に語っていただいた。生徒・教師・保護者の3者による相互の影響性（つながり）を踏まえながら部活動について研究していく視点はわれわれに少なかったのではないと思われる。次の桂先生には、ご自身がこれまで行ってきた部活動における適応研究から、適応感の規定因、適応感評定尺度、適応過程、そして適応感形成におけるソーシャルサポートの役割、などについて紹介いただいた。その中で先生

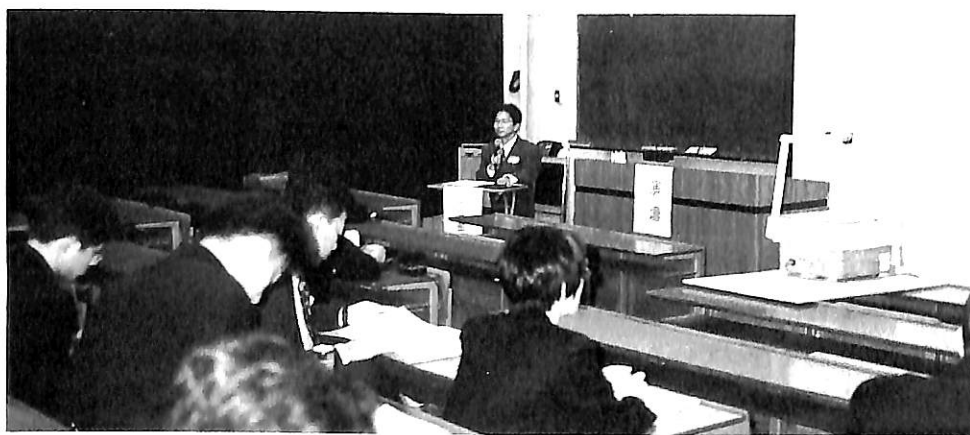


も指摘したように、部活動経験の心理・教育的効果についてこれまでのようなパーソナリティ要因だけでなく、もっと幅広い側面から検討し、そこで認められる効果について強く訴えていく必要がある。また、競技指向のスポーツで「心躍るような経験」は「勝つこと、チャンピオンを目指すこと」だけではないことを具体的資料をもって主張すべきである。最後に、阿江先生からは、「部活動における体罰」について話題提供をいただいた。この種の問題における研究の困難さそして希少さを考え併せると、先生より提示された指導者の体罰の実態に関する資料はとても刺激的でもあった。また、「部活動での体罰の問題は勝利至上主義の問題ではなく、スポーツの理念を实践する人の問題と言えるのではないだろうか」と結論づけたことから、リーダーシップの研究を再考することにもつながっていくように感じられた。

指導者の体罰からは、昨今問題となっている思春期の子供達の「切れる」といったことが連想される。指導者と生徒との間で人格と人格の強い結び付きがあるなら、両者が切れることもなければ、コントロールを逸するような感情的爆発もな

いはずと考えられる。3人の演者からは上述のようなことも含めて的確なお話しをしていただき、かつフロアーからは活発な質問・意見をいただいた。しかし、司会者の不手際もあり、今後の研究課題について明確にまとめるまでには至らなかった。特に、討議の後半では、「体罰」の問題について議論が集中してしまった。本シンポジウム参加者のところを大きく揺さぶったようであった。しかし今こうして当日のことを振り返ってみると、部活動場面での生徒・保護者・教師の相互性や部活動における適応といった他の演者からの話題と根底ではどこかつながっており、そこにある解決すべき問題の顕在化した一つの特異な事象と捉えることが出来る。

今回のシンポジウムが契機となって、「部活動がどうあるべきか」について、実証的な資料に基づいた主張を体育心理学領域からさらに行えるようになることを期待したい。また、単に現象記述だけの研究に終わることなく、それぞれの背景に流れているものを明らかにするような研究であることが望まれる。



司会の中込四郎氏

## 運動部活動の指導を通しての問題・課題

皆木香（新潟市立小新中学校）

中学校で行われている部活動について、実際に指導している立場の人間として、現在感じている問題点などをまとめた。ここでは部活動に関わる三者（生徒、保護者、教師）の立場でそれぞれの意識の違いから生まれる問題を中心にまとめた。

### 1. 生徒の意識

#### （1）不適応生徒について

生徒にとって部活動とは、原則的には毎日参加しなければならない、一生懸命取り組んでいれば褒められ、サボればしかられるという意識がある。これは各学校の部活動への取り組みに差があるとしても、いえることと思う。

部活動に参加する生徒の中には、積極的に参加する生徒と、消極的な生徒がいる。後者は、友達の誘いや親の決断で入部したため、部活動に目的がなく、休みがちになったり、練習そのものに体力的についていけないために消極的な生徒である。両者の参加状況に影響を与えるのが教師であり、保護者である。教師や保護者が積極的な生徒を褒めることが、消極的な生徒にプレッシャーを与える。また、積極的な生徒が消極的な生徒を非難し、部内の人間関係を悪化させることがある。そのため、消極的な生徒はさらに参加しづらい状況になる。

こうした部活動不適応生徒は、部活動だけでなく、さまざまな問題を抱えていることが多いが、教師や他の部員の働きかけが負担になっているこ

とも、不適応の原因だと考える。

#### （2）生徒の能力の自覚について

最近の生徒はすぐに痛みや疲労、苦痛を訴えたり、簡単に自分の能力の限界を口に出す。また、かなわない相手に立ち向かうことを極力避けようとする。自分の能力の限界を簡単に受け入れていること、失敗や負けを避けようとする人が多いように感じる。

### 2. 保護者の意識

保護者が部活動について考えていることや期待していることは様々である。部活動に協力的な保護者、学習を最優先に考えるために、部活動に批判的な保護者、また、「家にいられるより、外で悪さをするより部活で面倒を見てもらっていた方がいい。」というような、全面的に学校お任せの保護者などに分けられる。



なかでも、学校最優先の保護者は、部活動で疲れ果てて帰宅することが、塾での学習や家庭学習の妨げになることを心配している。部活動が生徒に与える様々な経験、体験を理解しない保護者が増えているように感じる。

### 3. 教師の意識

教師にとっての部活動とは、学年、学級の枠を超えて、生徒とつながる重要な機会であり、信頼関係を深める大切な場である。また、生徒にとっては、苦しさを乗り越えて、様々な練習や経験をして、勝利の喜びや成功の喜びを味わい、重要な機会だと考える。そのため、教育の一環とは言え、やはり、勝つことを目標にしてしまう。また、能力のある生徒や、積極的に参加する生徒を重視してしまう傾向がある。こうした意識が強まればその分、不適応生徒にはプレッシャーがかかる。しかし、教師の意識と生徒や保護者の意識とのずれが、教師のさまざまな悩みを生み出している。

その一つは、教師の常識が通用しない生徒が増えていることである。負けても悔しがらない、自分では頑張った、と思うレベルが低い、試合が近くても塾や親との外出が優先されるなど、熱心に指導してきた教師にとって、これは大きなストレスになる。また、痛みや疲労をすぐに訴え、我慢できるレベルが低い。しかし、無理やり練習させる時代ではないので、休ませるしかない。これもストレスになる。

もう一つは、専門外の種目の部活動顧問になることである。限られた時間のなかで、生徒を効率よく動かし、充実した練習をさせるためには、ある程度の専門性が必要と考える。しかし、専門外の場合、生徒の期待に応えるために、その種目を

勉強すればいいのだが、その時間は取りにくいいため、生徒の信頼を得にくい。生徒も教師もつらい思いをすることとなる。

### 4. 部活動指導における問題・課題

#### (1) 教師と保護者と生徒の関係

教師の部活動への熱意が、保護者や生徒に理解されない状況があり、批判を受けることがある。これについては、保護者に部活動の意義を十分理解してもらう機会を設ける必要があり、そのためにも、学校として、部活動をどのような教育の場ととらえているのか明確にしなければならない。しかし、勤務上の問題（17:00以降は勤務外活動）があり、明確にしにくい。

#### (2) 部活動の時間の確保

放課後の活動は部活動だけでなく、委員会活動や行事準備、生徒指導などで時間を取られ、部活動指導に十分時間を割くことができない。そのため、部活動で生徒と接する時間が減り、活動しているなかでの悩みや不満に気付けなかったり、配慮不足のために関係がこじれたりすることがある。指導時間の不足は、学校の運営上の問題とも関わり、簡単には解決できない。しかし、指導時間が十分取れるならば、教師と生徒の信頼関係も深まる。技術指導や充実した練習によって、生徒が達成感や成就感も味わえる。部活動への参加意欲も高められるのではないか。しかし、保護者の理解なしに厳しい練習はできない。

#### (3) 専門外の部活動顧問について

前に述べたように、専門外の種目の顧問の心理的負担は大きい。また、生徒にとっても期待外れは意欲をそぐ原因にもなる。部活動は勤務時間外のボランティア活動のため、専門外種目というだけで負担を感じる。顧問の専門性も、生徒の参加

意欲に大きな影響を与えていると考える。

以上、部活動指導について考えていることをまとめたが、部活動にかかわるものは、指導教師、生徒、保護者の他に、地域、学校の方針、職員構成など、様々な要素があげられる。しかし、ここでは私の経験の範囲内でのものが中心であるので、現場の声を伝えるという点では不十分な点も

あるかと思われる。今回、このシンポジウムに参加したことで、運動部活動がどうあるべきか、ということのを改めて考える時間をもつことができたこと、また、私自身が部活動を通して生徒に伝えたいことや、解決しなければならないことを改めて考えられたことも含めて有意義であった。

## 運動部活動と体罰 —指導行動にみられる心理学的問題—

阿江美恵子（東京女子体育大学）

部活動の問題は競技スポーツでも扱われ、学校教育内でも扱われ様々な視点からのアプローチがある。心理学的にどのような研究視点を持ちうるかというのが今回のテーマであったと思う。

運動部の現状について、いくつかの実態調査をおこなったことをもとに論をまとめた。

### 1. 運動部のおかれた状況

運動部がある意味で今日見られるような発展をってしまったのは、競技スポーツの競技者育成の明確な理念が我が国のスポーツ関係者になかったからではないか。従って、学校の運動部が何を目指すかが運動部問題の根底にある。そこから数々の問題が出てきていると思う。

競技スポーツは本来人間の競技能力にしたがってピラミッド構造になる。しかしそのピラミッドの頂点になりたいというのは当然の願いで、少し無理をしてもという考えが勝利至上主義と言っても良い。本来少しの無理が、スポーツに付加価値

が付くと（主として経済効果）、なり振りかまわなくなるので、倫理的な歯止めが必要であろう。

運動部の有り様の中でめちゃくちゃな競技スポーツのひとつの形が「指導者の体罰」であると思う。そこで、体罰について第一に紹介した。

### 2. 指導者の体罰の実態

運動部活動中に指導行動として体罰を用いられたという報告は多い。心理学的に見れば、罰が行動の矯正には役立たず、情動的な緊張や恐怖を増すだけであることが明らかであるが、「体罰を受けたので強くなった。上手になった」と認識しているスポーツ選手も多い。1996年に女子体育大生596名（19～21歳）を対象にして過去の運動部指導の中で体罰を受けたかどうかを調査した（昨年学会で発表）。対象者のうち体罰を報告した者は223名で全被験者の37.4%であった。体罰は部活の指導者からであったと全員が答えた。体罰の理由は体験者の70～80%が「言われたことができな

い」と「ミスした」ことをあげた。

体罰体験者と非体験者が指導者の体罰をどのように感じているかを「絶対に殴るべきでない」、「仕方ない」、「条件つきで許せる」、「殴って良い」、「わからない」の5項目から一つ選択させると、体罰非体験群の方が体罰体験群より指導者の体罰を否定し、体罰体験者群の方が体罰を肯定することがわかった ( $\chi^2=51.09, p<0.01$ )。しかし、両群とも条件付きの肯定は40%を越えていた。

上述の2群に「指導者になったら殴るか」との質問に解答させると「決して殴らない」という体罰否定者は体罰の体験のない者の方が多かった。

教育場面での体罰は法律で禁止されている。スポーツで勝利するためのテクニックであれば体罰イコール勝利至上主義ということになる。しかし、社会が成熟して現在よりももっと個人の権利が尊重されるようになったらこのような指導者が生き残ることはできなくなるはずである。ということは、部活動での体罰の問題は勝利至上主義の問題ではなく、スポーツの理念を実践する人の問題と言えるのではないだろうか。

### 3. 指導者の指導行動への関心

体罰を指導手段と考えている指導者が少ないことが明らかになったが、指導者の指導行動についての研究はどのように行われているのであろうか。次にその点を見てみた。

指導者は人間を指導するのであるから、その指導が相手にどのような影響を与えるかに関心を持

つべきである。指導者の行動をビデオで撮り、分析できると思う（当日は実例を報告した）。指導行動については言語活動を中心にアメリカでも研究されているが、日本でのデータはあまり多くはない。

### 4. 学校教育の中での部活動

体育系の大学に入学してくる学生の一部には勉学に関する「落ちこぼれ」の者がいる。知的能力が問題ではなく部活動だけを奨励されてどうも十分な勉学トレーニングを受けていないのである。学力の低いスポーツマンのことはもっと研究されてよいと思う。

### 5. 最後に

競技スポーツに運動部が影響されすぎていると思う。子どもの教育現場での部活動の意義や競技スポーツをどうとらえるかをもっと議論できる資料を心理学は提供できると考えられる。さらに生身の人間（つまり泣いたり笑ったりの感情を持ち、ミスする者）がスポーツをしているということや、スポーツ活動が人間を人間らしく扱っているかを示す資料も心理学は提供できると思う。シンポジウム後の討論は体罰ということに集中した。他の演者の発表と十分に噛み合わなかったような気はするが、改めて体罰が何を生むのかを指導者に考えて頂けたなら、発表した意味があったと考えている。根底に競技スポーツの問題があると思うが、その点が議論の対象にならなかったのは残念であった。





発表中の阿江美恵子氏

## 〈シンポジウム傍聴記〉

### シンポジウムを傍聴して

伊藤 豊彦（島根大学）

教育改革論議の一環として運動部活動が取り上げられ、文部省の調査が行われたり、学校体育、体育科教育的に相次いで特集が組まれるなど、運動部活動が改めて関心を集めている。このような流れの中で、また、個人的にも親として再び運動部にかかわる機会が増えた筆者にとって、今回のテーマは非常に興味深いものであった。これまでの部活動関連の心理学的研究がややもすると「勝

利」あるいはそれを目指すための「競技力向上」を目的としたものに偏り、運動部に参加する個々の生徒にとっての部活動（スポーツ）の意味、あるいは生徒の全人格的な発達を目指す指導の在り方などについてあまり関心が払われてこなかったのではないかという漠然とした印象を持っていたためかもしれない。

さて、シンポジウムは、司会の中込先生から

テーマ設定の意図についての説明があった後、中学校で部活動を指導しておられる皆木先生の話から始まった。先生は、部活動指導における問題点を生徒・保護者・教師の3者の立場から詳細に説明された。価値観の異なる多様な生徒を、その背後にいる保護者をも意識しながら指導しなければならない指導者の悩みが、改めて伝わってくる。ただ、これらの問題を解決するためにも、部活動を指導する指導者間の連携や、校長を含めた教師全体の部活動に対する意識なり支援体制がどうなっているかについての言及がなされなかったのが残念であった。

次に運動部活動への適応の問題を検討されてきた桂先生から研究の視点と具体的な経過についての発表が行われた。指導者に関わる研究において、従来から用いられてきた従属変数としての競技成績に代わる指標として関心を持ち、実際少なからず尺度を利用させていただいている筆者にとって先生の説明がきけたことは幸いであった。部活動の教育的効果やそれを導くための指導行動を検討しようとするとき、どのような指標を用いてそれを判断するかが極めて重要だと思われる。そして、その指標の選択時に研究者の部活動に対する理念が色濃く反映されているのではないだろうかと考えている。このような意味において、「適応」というキーワードは運動部にかかわる研究を進めていく上で新たな視点であると同時に、学校生活全般への適応において運動部活動への適応が少なからず寄与することを考えるなら、このような視点からの研究は今後ますます必要となると思われる。

続いて、阿江先生から運動部活動における体罰の問題が上げられ、フロアーから大きな関心と呼んだ。体罰を受けた経験のある学生ほど、た

とえ消極的にせよ自らの体罰使用を是認する傾向が高いとの指摘は、指導者養成に携わる者への警鐘である。自らの体罰の問題に言及しないという意味において、そのような傾向を助長しているのではないかと。ただ、先生は体罰の行使を「スポーツの理念を実践する人の問題」と指摘されたが、フロアーから指摘もあったように生徒を管理する手段として、あるいは競技力向上のために体罰を是認する社会的風土がなお存在していることも事実である。また、度重なる批判を受けつななお体罰が部活動の指導において行使されているという現実には、それを行使している指導者が体罰を経験的に「有効な」指導法として認識（誤解？）していることに他ならない。このような意味において、われわれが単に体罰やそれを行使する指導者への批判に終始するだけでは問題は解決しないであろう。それゆえ、あくまで実証的データに基づきながら、体罰がもたらす負の効果を粘り強く指摘するとともに、体罰に代わる有効な指導法なり方略を提供する必要があるのではないかと思われる。体罰を行使している指導者も、成長し、変化し得る「生身の人間」であると考えられるならば、そこにどのようなデータが提供できるかがわれわれに課せられている課題なのではないだろうか。

研究をする上で、運動部の参加者を研究対象とすることが多いものの、運動部活動そのものを問題として取り上げる機会は少ない。また、関連している研究であってもその研究テーマから運動部活動との関連を読み取りにくいようにも思われる。このような状況にあって、今回のシンポジウムは、運動部活動の問題を再認識するまたとない機会となった。4人の先生方に感謝すると同時に、今回のシンポジウムが運動部活動にかかわる

心理的研究の動機づけとなることを期待したい。  
また、筆者自身、運動部活動に「過剰適応」した

学生を相手に、実証データに裏打ちされた「理念」を語っていきたいと考えている。

## シンポジウム傍聴記

竹之内隆志（名古屋大学）

研究者という立場にありながら、自分の研究課題を問われると答えに窮する時がある。そのような自分にとって、運動部での研究課題の探求を目的としたシンポジウムは時宜を得ていることであった。しかし、シンポジウムを傍聴していくにつれ、何とも言いがたい混乱を感じたのが正直な気持ちである。それは、話題提供後になされた討議が誌シンポジウム企画の意図と異なった方向へ進んだように感じていたからだと思う。

冒頭、司会の中込先生よりシンポジウムの目的が「運動部活動はどうあるべきかというイデオロギーに基づいて、心理学領域からの実証的研究を進めていく視点を模索する」ことにあると説明があった。そして、3名の先生より話題提供があり、個々の先生が話された内容自体は理解できたと思う。しかし、その後の討議では、心理学的研究視点の模索というよりも、勝利至上主義や体罰の「非」といった倫理的・イデオロギー的な討論が中心になったように思われた。

これらの倫理的・イデオロギー的問いは必要だと思う。しかし、もし仮に体罰を振るう先生がいた場合、それが倫理的にダメだと言って、どれだけの先生が行動変容を起こすのだろうか。倫理的に矛盾する行動を起こす人がいるからこそ、心理

学の研究が必要なのではないかという疑問を感じていた。また、阿江先生のご発表の中では、体罰を受けてもすべての人がそれを拒否しているわけではないという事実も示された。倫理的に受け入れてはならない行動を受け入れる生徒もいるのである。これらの疑問や事実を受けとめながら、私としては、倫理的に体罰が非だという討論を離れ、心理学的研究として扱うには何を問題とし、どのようなアプローチが考えられるのかを討論して欲しかった。例えば、フロアーからは、指導者と生徒に信頼関係があり、生徒も自分の非を認めている場合の体罰は、適切な加罰と言えるのではという質問があった。その際、適切か否かはさておき、指導者と生徒の関係の中で体罰をみていこうという視点について、もう少し討議が深まると良かったように思う。

さて、こうした点も踏まえながら、私見としては、運動部での対人関係について、より詳細に調査していくことが一つの課題ではないかと考えていた。桂先生は、適応感の規定要因として、部内における自己有能感、部の指導者・運営、対チームメイト感情などを挙げておられた。お話を伺っていると、個々の要因は独立しているように聞こえてしまう。しかし、皆木先生は、能力があ

り、部活動に積極的に参加する生徒（有能感が高い生徒）が、時として消極的生徒を生み出すこと（対チームメイト感情の悪化）、そして前者の意識は教師の対応（部の指導者・運営）から生まれることがあると述べておられた。桂先生が挙げられた適応感形成のための要因は、実際には因果的に、時には対立的に作用しているようである。そうしたダイナミクスに迫れると面白いと感じていた。

以上のように、個人的に感じたことを記してきたが、研究課題を探っていくことが相当に難しいことを改めて認識させられた。その原因は、桂先生が述べられたように、現場の中に研究者が浸透していないからだろう。また、阿江先生が述べられたように、今後は現場での行動観察が必要だと思われる。言葉で言うほどに簡単なことではないと思うが、機会を作り運動部の実際の姿を見に行ってみたい。



シンポジウム討論中の演者3氏



熱気あふれるシンポジウム会場

## 一般研究発表 (座長報告)

### <口頭発表>

演題番号 037養20301～037養20303 座長 調枝 孝治 (広島大学)

「競技種目特性からみたアスリートのバランス能力

—静的バランス能力と動的バランス能力の獲得・学習— 吉川政夫 (東海大学)

「高校野球指導における新しい打者評価法の開発」

朝西知徳 (米子商業高校)

「競走状況における長距離走者の認知とペース再生の関係」

高井和夫 (筑波大学大学院)

朝西氏の発表取り消しで、吉川氏と高井氏の発表内容以外の点について言及します。

吉川氏の研究は、運動スキルの習得は、各運動課題が特殊に内在させている情報を処理することによって身につくという、いわゆる運動課題に方向づけられた観点 (task-oriented approach) からの研究です。本来なら、副題や研究目的にあるように、体操競技のバランス能力の獲得・学習の様子を示されればよかったと思います。それが、体操競技者、体育会所属の運動競技者、一般学生という、経験者—未経験者の対比的構図の下で彼らに静的および動的バランスに関係したテスト条件を課し、その結果から、「体操競技の競技種目特性は動的バランス能力にあるといえよう」と述べられています。体操競技でよく用いる平均台でテストされれば、このような結果は当然といえます。しかし、この結果から果たして体操競技者以外の被験者は、動的バランス能力が低いといえるのでしょうか。おそらく、各競技種目に特殊な動的バランスがあるはずで、それならば、体操競技者に体操競技も含んだ多様な競技で要求される動的バランスのテストを行い、その上で体操競技種目特有の動的バランスを云々するのがよいと思います。

また、静的バランス能力は、3群間に有意な差がないということですが、この場合、運動の速度、強度、正確性等の負荷を変化させた後に、静的バランスのテストをすれば群間の特徴が鮮明になると考えます。それにしても、競技種目の特性をあきらかにするには、テストにより既習のレベルを問題にするよりも、各競技能力の習得過程で形成される特有な機能の同定をめざす過程に方向づけられた観点 (process-oriented approach) からの研究が望まれます。

高井氏の関心は、競合走での自己と他者の動きの相互協応的な参照の方略の解明かと考えます。これからの研究で重要かと思われる点に触れておきます。まず、ダイナミックな競合状況の時系列データの収集です。お互いの走行時間、ピッチ等 (バイオメカニクス分野を参照)、呼吸・心拍数などの生理的指標、小型トランシーバでお互いの動作の認知評価を報告し、それを尺度得点化して時系列データとします。そして、それらを相互相関関数で表せば、相互協応的な関係のパターンが明らかになります。筑波大学にはこの種の研究設備は整備されているはずです。がんばってください。



演題番号 037養20304～037養20306 座長 吉川 政夫（東海大学）

- |                        |                   |
|------------------------|-------------------|
| 「系列パターンの過剰学習中の適応制御過程」  | 調枝孝治（広島大学総合科学部）   |
| 「打鍵による標的強度値出力の課題と準備電位」 | 正木宏明（早稲田大学人間科学部）  |
| 「変換視における視覚FB情報の有意性」    | 平田智秋（筑波大学体育科学研究科） |



発表中の平田智秋氏

演題番号 037養20307～037養20309 座長 正木 宏明（早稲田大学）

- |                                |                 |
|--------------------------------|-----------------|
| 「“かわす”動作のトレーニング効果」             | 岡本直輝（立命館大学）     |
| 「的の大小が運動パフォーマンス及び学習に与える影響について」 | 広瀬 徹（愛知教育大学大学院） |
| 「開放技能の習熟に伴う視覚的手がかりの変容」         | 木島章文（筑波大学大学院）   |

このセッションでの研究発表はいずれも運動学習に関係しており、トレーニング方法や習熟レベ

ルの評価法に関する示唆に富んだ内容であった。岡本氏は、デフェンスプレイヤーによる阻止をオ

フェンスプレーヤーが「かわす」という動作の習熟過程を実験装置の工夫によって検討した。被験者（オフェンス）はデフェンスプレーヤーにみたてた光刺激装置を、指示された方向にかわして走り抜ける動作を6日間練習し、そのときのランニングタイムが記録された。光刺激装置の作動時点を、被験者が装置前1mに到達した時点と3mに到達した時点とする2条件が設定された。その結果、1m条件ではトレーニング効果はなかったものの、3m条件ではランニングタイムに向上が認められた。これらの結果は、被験者の距離に関する見積り能力と関連しており、デフェンスプレーヤーとの間合いと相手動作の予測が重要であることを認識させるものであった。また、ここで用いられたトレーニング方法の有効性を示す研究報告であった。

広瀬氏は、ガスガンによる的当て課題において、的の大きさを操作することで視覚集中力とパフォーマンスの関連について検討した。大的と小的でのパフォーマンスの差異を調べるだけでなく、4日間練習させた際のポストテストにおける成績を報告した。視覚を一点に集中するうえでは小的条件の方が有利と考えられるが、実際には被験者の成績は大的条件の方が高いという興味深い結果が報告された。同様の結果は練習後のポストテストでも認められた。広瀬氏はこの結果の原因を、小的を狙う際に強く感じるプレッシャーや、大的を狙う場合に行われる中心位置の見極め過程に求めている。ポストテスト時に小的を用いることなどによって、この現象がさらに明らかにされることを期待したい。



発表中の木島章文氏

木島氏は、アメリカンフットボールのランニングバック選手を対象に、開放技能の習熟レベルに伴う視覚の手がかりの変容過程を検討した。技能レベルの異なる選手にボールキャリアリング課題を遂行させて、各選手がどのような視覚手がかりを用いていたかについて調査する一方で、各選手の「うまさ」という質的側面を指導者によって評定させ、両変数の関連を統計的手法の工夫によって見事に捉えた。木島氏は数年前よりランニングバックの走路意思決定過程を発話分析で研究されていたが、質的側面の数量化という難題を本研究で用いた手法によって解決する段階にまで達しており、研究が洗練されてきた印象を受けると同時に、今後の展開がさらに期待される。

演題番号 037養20401～037養20404 座長 杉山 佳生（鹿屋体育大学）

「体育授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響」

細田 朋美（東京家政大学非常勤講師）

「体育の授業における児童の心理的ストレスの分析－

「無力的認知・思考」のストレッサー因子と主体的要因との関連－」

佐々木 万丈（国立仙台電波工業高等専門学校教養系保健体育科）

「身体活動の心身機能に及ぼす影響について－ランニング中の心の状態について」

滝 省治（甲子園大学）

「技術レベル別にみた選手の心理的特性と競技意欲との関係」

伊達 萬里子（武庫川女子大学）

細田先生らは、目標志向性と有能感の認知が動機づけに及ぼす影響を、体育の授業場面对象として検討した。運動・スポーツ場面における先行研究では、課題志向の場合では有能さの認知の高低にかかわらず動機づけが高く、自我志向の場合は有能さの認知が高いと動機づけが高く、有能さの認知が低いと動機づけも低い、という結果が報告されており、本研究は、これらの関係を体育場面において検証しようとしたものである。結果は、目標志向性にかかわらず、有能さの認知が高ければ動機づけも高いというものであった。ただし、内発的動機づけに関しては、志向性×有能さの認知の交互作用が有意であったということから、先行研究を支持していないとは必ずしも言えない結果であると理解した。

佐々木先生は、小学校の体育の授業におけるストレッサー因子を同定し、それらに対する認知的評価のあり方について検討した。ストレッサー因子としては、「有能感の動揺」「自信の欠如」などの9因子が抽出された。ストレッサーに対する認知的評価についての分析からは、他者との関係

に関する側面において、女子が男子よりも強いストレスを感じているという傾向が見出された。また、認知的評価と授業の好き嫌いとの関係もいくつかの因子において確認された。中学生を対象とした調査も行っているということなので、ストレッサーについての小学生と中学生の比較分析が期待される。

滝先生らは、ランニング中の心理状態を把握するための調査を行い、体力に対する自己評価や内田クレペリン精神検査による性格類型、健康度との関係を検討した。ランニング中の心理状態としては、因子分析により、「陶醉感」「否定感情」「幸福感」「浮遊感」「不機嫌」「ひらめき」の6因子が抽出された。また、これらの心理状態と体力に対する自己評価との関係の分析からは、体力があるという学生は体力がないという学生に比べて、陶醉感や幸福感を感じる人が多いという結果が得られた。運動の好き嫌いとの関係においても同様の結果であった。これらの結果は、ランニング運動の爽快感には個人的要因が関与していることを示唆しており、心理療法や心理的健康の

増進の目的でランニングを利用する際に注意すべき点が指摘されたと言えよう。

伊達先生らは、新体操のトップレベルの選手及び一般大学選手を対象として、性格特性（神経症的傾向、向性）と競技意欲との関係を検討した。研究の主要部分は、神経症的傾向の高い選手とそうでない選手との競技意欲の比較であった。座長として特に関心を持ったのは、トップレベル選手の神経症的傾向群と一般選手の普通群との関係である。情緒安定性や競技価値などを含むほとんどの尺度で、トップレベルの選手の方が競技意欲が低いという結果となっていた（普通群同士の比較ではこの関係は見られない）。新体操のトップレベルの選手にはどのような心理的特性や競技意欲が必要とされるのかという問題に対して、本研究は大変興味深いデータを提供していると感じた。



演題番号 037養20405～037養20407 座長 滝 省治（甲子園大学）

「スポーツにおける行動規範の研究 ―ニュージーランドと日本における体育学部生の比較―」

賀川 昌明（鳴門教育大学）

「ポジションに対する認知とパーソナリティ、注意スタイルとの関係」

杉山 佳生（鹿屋体育大学）

「幼児の運動遊びが心理的発達に及ぼす影響」

森 司朗（東京学芸大学）

賀川氏等はスポーツにおける行動規範について調査条件を吟味した研究を行われた。日本とニュージーランドの体育系学生を対象にした比較研究である。近年、スポーツに関わる暴力事件が問題とされている中で、スポーツバイオレンスは興味深い問題である。スポーツ行動規範の因子分析の結果として16因子を抽出して分析している。国別比較では日本の体育系学生がスポーツマン

シップに準拠した態度を保持していると報告された。しかし、日本の体育系学部の対象者の競技レベルと対象国とのそれとの差、スポーツ種目の問題あるいはラグビーを中心としたスポーツ文化等と比較にまつわる統制条件が大きいことが指摘された。発表時間の関係でまとめが聞けなかったのが残念であるが、質問紙、因子得点の方向性に関する質問があった。

杉山氏の研究はポジション適性を指向する研究といえようか、一般的なボールゲームを想定したポジションに対する被験者の認知とパーソナリティ、注意スタイルの関係についての発表であった。MPIテストで見た被験者の向性と目標に対する位置関係に有意な差が見られ、前列のポジションを選ぶ者ほど外向性傾向を持つことを示した。しかし、被験者の持つ注意スタイルと選択ポジションには有意な差は認められなかった。杉山氏は特に後方ポジションに附随する積極的意義の解明を述べられていたが、今後の研究に期待したい。ここでは左右の問題、技術的關係、空間認知に対する質問があった。

森氏は、実際の指導場面に、幼稚園児の有能感を高める目標を持った運動遊びの指導を取り入れることで、被験者のポジティブな変化を捉えよう

とする精力的な縦断的検討を行った。有能感育成の目標を持った群と持たない群、これに性差を加えた2要因分散分析によって検討している。被験者の運動に対する有能感に指導前後の有意な差は認められなかったものの、指導を行った教師による幼稚園児の行動評定には有意な差が認められ、有能感育成を配慮した指導群に協調性、行動の積極性等の意図的な教育効果が出現したと報告された。実験条件について、実験群、統制群の初期レベルに対する質問があった。

演題番号 037養20408～037養20410 座長 森 司朗（東京学芸大学）

「大学女子トランポリン競技選手のボディーイメージ」佐藤 こずえ（学習院大学）

「女子競技者のジェンダーと性役割葛藤」

石塚 正一（国際武道大学）

「プロサッカーのキャリア移行に関する研究」

豊田 則成（筑波大学大学院体育科学研究科）

私が座長をさせていただいたセッションでは、以下の3演題の内、2題が女子競技選手が抱える問題と1演題がプロ選手のキャリア移行に関する研究の発表であった。

「大学女子トランポリン競技選手のボディーイメージ（佐藤こずえ、斎藤滋雄、長谷川輝紀、上岡洋晴）」の研究では大学女子トランポリン競技選手のボディーイメージに関して、競技選手の持つボディーイメージと競技レベル間の差異を明らかにするためにBody Shape Questionnaire (BSQ)の邦訳と身長・体重・理想体重などを用いて、大学

女子トランポリン競技選手、女子外国選手と一般若年女性を比較検討した研究である。結果としては大学女子トランポリン競技選手は、一般若年女性（非運動選手）よりボディーイメージの歪みが小さいという結果など報告された。その中で「競技における痩せるという意味とただ痩せるという意味」の違いや「外国人選手の結果に関する」質問などが出された。

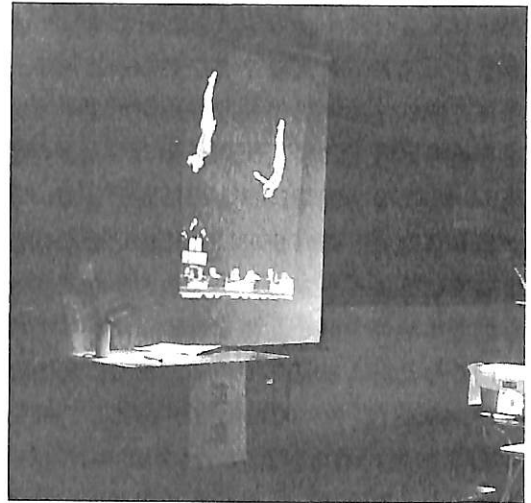
第二の演題は「女子競技者のジェンダーと性役割葛藤（石塚正一、佐藤みどり）」という報告では、女性性と密接な関係があると予想される性役



割葛藤と身体イメージから女子競技選手のジェンダーを検討し、重回帰モデルから明らかになったことを報告された。重回帰モデルの解釈などについて質問が出され、今後、より詳細な分析の必要などが指摘された。

第三の演題は「プロサッカーのキャリア移行に関する研究（豊田則成，中込四郎，松本光弘，田嶋幸三）」で面接調査から得られたキャリア移行に関するエピソード（一事例）に基づいて、同一性体制化の観点からプロサッカー選手のキャリア移行後の適応状態を把握し、それに対して社会化予期と時間的展望への影響を検討した研究であった。質問としてはキャリア移行に関する社会化予期と時間的展望のモデルに関する質問などが出された。一事例に止まったものであったが、半構造化された面接マニュアルに基づきモデルの考えに基づく興味ある結果が報告されていたが、今後の

事例の積み上げによるモデルの検証が期待される。



発表中の佐藤こずえ氏

演題番号 039養20301～039養20304 座長 土屋 裕睦（大阪体育大学）

「イメージ想起能力に及ぼす動作法の影響について～水泳選手の動作体験様式の変容に着目して～」

百瀬 容美子（市川市健康増進センター）

「アーチェリー選手におけるメンタルトレーニングと運動パフォーマンスに関する研究

ー補助機器を用いたメンタルトレーニング法の試みー」

齋藤 潤（静岡大学大学院）

「フラストレーション場面における大学陸上競技者の反応

ーP-F studyによる種目別・競技実績別分析ー」

石田松五郎（東海大学大学院）

「色・情景・音を用いた脳波フィードバックトレーニングによる

Fp<sub>2</sub> α<sub>2</sub>波増強の検討ー注意集中を中心にー」

丹羽 勁昭（聖母被昇天学院女子短期大学）

百瀬さんは、水泳選手16名を統制群と実験群に分け、実験群には各40分程度の動作法を計5回実施した。実験前後の両群におけるイメージ想起能

力、タイムトライアル（100メートル自由型）の結果からは、動作法の実施によって、イメージの統御性の向上とタイムの短縮が認められた。発表

資料では、実験群の動作体験様式にかかわる内省報告が提示され、その変容過程の詳細を見ることができた。これによれば、「リラックスが上達した選手」「動作法を受け入れることに抵抗のあった選手」「当初から運動感覚が鋭かった選手」の3名は、動作法実施時の体験様式がポジティブに変容するのと呼応して、実際に泳いだときの動作体験様式もプラス思考的なものに変化していることが読み取れた。百瀬氏は「動作法による体験様式の変容は、イメージの統御性能力を向上させ、さらにその随伴効果としてパフォーマンスの向上をもたらした」と総括している。ただ、想起能力のうち、統御性(TVIC)だけが向上し、鮮明性(SMI-S)にその効果が認められなかったのはいかなる理由であろうか。確かに動作課題の解決と統御性の関連性は十分考えられるが、一方で鮮明性をともなわないイメージを、操作あるいは「統御」することは可能であるのか。いずれにせよ本研究は、臨床場面だけでなくスポーツ選手に対する適用に実績のある「動作法」とイメージ想起能力との関係を検討した、貴重な研究と位置づけられよう。

斎藤氏は、現場でのメンタルトレーニングの活用状況について「十分でない」と指摘し、補助機器を用いたメンタルトレーニングの簡便法の必要性を強調した。実験では、ピーエムシー社製の「アルファシータ」を用い、高校アーチェリー部員24名を統制群と実験群に分け、その効果を検討した。その結果、「アルファシータ」を用いることで、POMSで測定される気分が改善され、 $\alpha$ 波が効果的に出現するようになり、さらに技術の向上を示唆するデータも得られたとのことであった。質疑では、標題のメンタルトレーニングという用語を巡って、バイオフィードバックやリラク

セーションといった用語との区別が必要であるとの意見が出された。この点について斎藤氏らからは、現場での活用を考慮した場合、メンタルトレーニングの「とっかかりとして」本法が果たす役割は大きいと考えていると説明があった。リラクセーションをねらった方法や集中力の向上をねらった方法など、メンタルトレーニングのねらいは様々である。本法の有効性を説明する理論的な基盤やメカニズムを明らかにすることも確かに重要であろうが、それ以上に本法の体験をきっかけに「メンタルトレーニング」に興味を持つ選手が増えることこそ、大きな収穫であるかもしれない。この研究では、その有効性を示す基礎資料を得るために、生理指標・心理指標・パフォーマンス指標を精力的に収集している点を評価しなければならぬであろう。たとえば、他のリラクセーション技法との比較や、「アルファシータ」装着者の内省報告などが提示されていれば、本法の有効性について、さらに理解を深めることができたのではないかと考えられる。

石田氏のご発表は、従来スポーツ心理分野で多用されてきた質問紙ではなく、投影法の一つであるP-F study(絵画欲求不満テスト)を手がかりに選手理解を深めようとする試みであった。陸上競技選手を調査の対象者として回答を得、語義水準から慎重にスコアリングを図ったとの説明があった。得られた回答から種目別・競技実績別の分析を試みたところ、いくつかの特徴的な差が認められ、そのうち発表では、競技実績の低い選手(インターカレッジ出場経験のない選手)に「自分には責任がないとする反応や失敗を認めないという反応が認められる」と指摘し、指導方法との関連から考察を展開した。また、一般成人と比較して、調査対象者には「無罰」と「自責固執」反

応がやや高く出現しているとの知見も得られたようである。これらの特徴を競技環境のなかで理解し、また選手の可能性を伸ばす指導法を模索しようとする試みは非常に重要なものと受け止められよう。筆者個人は、本研究に対して非常に興味を持つと同時に、一方で特性的な性格論と指導、あるいは競技力向上と選手理解といった点については、われわれスポーツ心理に携わる者は慎重にならないのではないかと感じた。たとえば、競技実績の低い選手には「言い訳的な反応に対する指導」が課題になるとの指摘は、その主張が核心的であればあるほど、その指導の在り方に熟慮が求められるであろう。本研究の続編として、さらに選手理解を進める研究が蓄積されていくことを期待したい。そのような知見の蓄積とともに、競技力向上だけでなく、選手の可能性を育てるような指導法が提案できればと希望する。

丹羽氏のご発表は、バイオフィードバックトレーニングに関する一連のご研究をさらに進展させ、色・情景・音を用いた独自の課題より、 $Fp_2$   $\alpha_2$ 波増強について検討された。従来のバイオフィードバックトレーニングと比較すると、イメージを積極的に用いた点がユニークであるといえよう。

実験の具体的な様子を見てみると、ボディソニックに横たわった被験者は緑色の森、黒色の暗闇、青色の海をイメージするよう教示を与えられている。同時に、被験者がリラックスした状態でイメージできるよう、小鳥のさえずり、虫の音、海の音を聞かせている（以上実験Ⅱ）。このようなトレーニングの結果、一点集中状態で $\alpha_2$ 波と $\alpha_3$ 波が、そして多点集中状態で $\alpha_2$ 波が有意に増大する結果を得た。丹羽氏は、本研究の実施にあたり具体的に3つの仮説を構築されていたが、「注意の多点集中状態の良いとき、優勢前額皮上電位 $\alpha_1$ 波が多く出現する」という3つ目の仮説のみ検証できなかったと総括された。おそらく課題の困難さとの関連から導かれた仮説と推測されるが、一点集中状態と $\alpha_1$ 波には負の相関が認められており、この辺りフロアーとの質疑があれば議論が深められたのではないかと考えられる。なお、丹羽氏は発表に際して、8頁からなる資料を配布され、実験手続きなど発表時間内で言及できない部分を補うよう配慮いただき、本研究のような実験に馴染みのない筆者でも、実験Ⅰから実験Ⅲまでの概要を把握することができ、大変楽しく拝聴できたことを報告に付け加えたい。

演題番号 039養20305～039養20308 座長 丹羽 勁昭（聖母被昇天学院女子短期大学）

「体育教師の指導による学生の人柄と精神健康度の変化について——Ⅲ」

呉 萬福（国立台北師範学校）

「大学新入部員の適応過程の検討(1)ーソーシャル・サポートの観点からー」

土屋 裕睦（大阪体育大学）

「大学新入部員の適応過程の検討(2)ー風景構成法を通じてー」

細川 佳博（筑波大学大学院）

「高校運動部活動における生徒のライフスキル獲得に関する研究」 上野 耕平（筑波大学体育科学系）

「体育教師の指導による学生の人柄と精神健康度の変化について—III」(呉)

国立台北師範学院は1996年に設立100周年を迎えたが、体育学科の設置は1993年であり、3年半が経過した。これを機会に「経師兼人師」(本を師とすると共に人の師となる)を指導目標として人間づくりに励んだ成果を検討し、その結果を報告している。体育学科第1期生(男子22名、女子17名、計39名)を対象に3回のU-Kテストを行った結果から、精神健康度は1・2・3回目と次第に向上し、また、現場での評判もよいとのことであった。当日の質問とも関連して、台湾の体育指導者の現状は日本と良く似ているので、人間教育が必要だと考えて指導理念としたとのことであった。その他台湾の体育の状況などについての情報提供があり、大変有意義であった。

「大学新入部員の適応過程の検討(1)—ソーシャル・サポートの観点から—」(土屋・中込・桂)

大学新入部員の適応過程を「他者との係わり合いの変容」と「精神内界の変容」から検討した一連の研究の一部である。本研究(研究1)では、サポート授受の互惠性に着目し、大学の新入部員にとって望ましいソーシャル・サポートのあり方を探究するため、大学体育会運動部員の1年生39名(そのうち女子7名)を対象に5月下旬から3ヶ月毎に計3回、質問紙法による調査をしている。その結果、与えたサポートより受け取ったサポートの方が多いと認知している新入部員では、心理的負荷感が生じ、ソーシャル・サポート満足感が低く、またチームメイトや友人との相互作用が、新入部員の適応過程に強く影響すると推測している。そして、「受動的な受け手」から「能動的な受け手」への転換を助長するようなプログラムが

必要であることを主張している。質問項目の信頼性にやや不安が残るが、サポート授受の互惠性に着目した興味のある研究であり、今後の発展が期待される。

「大学新入部員の適応過程の検討(2)—風景構成法を通じて—」(細川・中込・土屋)

新入部員の適応過程を数量的に、あるいは行動レベルの現象からのみ捉える試みには限界があるとの考えから、プロジェクト法である風景構成法を用いて、時間経過に伴って変化している3枚の絵をもとに、大学新入部員の適応過程を検討した事例発表である。すなわち新入部員A(女性)に5月下旬、7月上旬、10月中旬の3回風景構成法で作品を描かせ、9つの質問と独自の文章完成法(SCT)を作成し解答を求めた。その結果、メルヘン童話のような世界から、より現実的な世界へと絵の感じが変化し、内的世界がより現実世界へと向かい適応をみせた事例であるとまとめている。会場からの質問とも関連して、本研究で行っている考察(解釈)やまとめ方についての妥当性や信頼性への質問が出された。すなわち被験者の描いた絵の解釈に客観性が感じられないという質問(意見)に対して、発表者からは、まだ、試行錯誤の段階であるとの解答であった。プロジェクト法という人間の内面を直接問題にする重要な方法だけに、公共の理解が得られるような研究法、特に解釈の仕方を早い時期に示してほしいものである。

「高校運動部活動における生徒のライフスキル獲得に関する研究」(上野・中込)

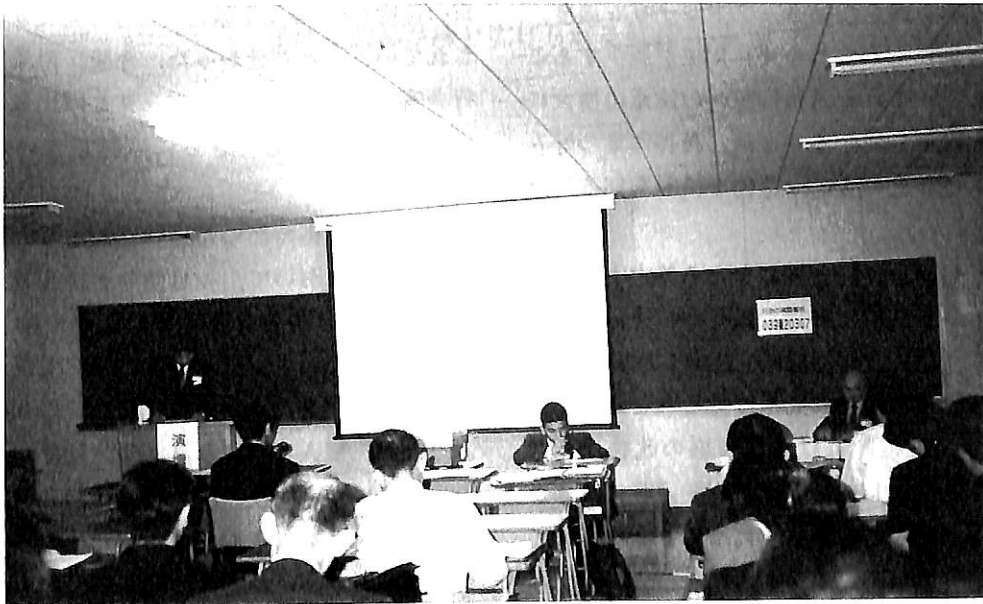
スポーツ経験で獲得される心理的スキル(競技状況スキル)と、日常生活場面で必要とされるスキル(ライフスキル)との関係に注目し、競技状

況スキルはライフスキルに移行可能であり、そこには指導者からの働きかけが影響するとの仮定から研究を出発している。まず、研究1では、両スキルの測定尺度を作成し、研究2では、その尺度を用いて、指導者の働きかけとスキル獲得の関係を検討している。

その結果、研究1では両尺度に同様な2因子が抽出されたことから、両場面が対応関係にあると解釈し、研究2では、高校運動部活動に参加している生徒は、参加していない生徒よりライフスキルを獲得しており、その獲得は指導者からの適切な働きかけによって可能であるとしている。

会場からの質問と関連して、まず、研究1の両尺度に同様の2因子が抽出されていることと関係

して、質問項目が両場面に対応した殆ど同じ内容であるため、同一対象（高校運動部員307名）で調査した場合は、因子分析では同じ因子が出てくる確率が高くなる筈で、その結果をもって、競技場面と日常生活場面が対応関係にあると考察することの問題点が指摘された。すなわち両場面に対応関係にあるものと対応関係にないものがある筈である。したがって筆者のようなまとめをすることは妥当性に欠けるのではないかということである。研究2は、研究1で作成された尺度に依存しているのでその範囲内で理解することになる。大変重要な内容について研究しているだけに、今後の展開が待たれる。



発表中の細川・土屋の両氏

演題番号 039養20401～039養20404 座長 吉田 茂 (筑波大学)

「運動中に行われる精神作業が主観的運動強度に与える影響」

星川 佳広 (東京大学大学院教育学研究科)

「運動を用いた高齢者のストレス・マネジメント

—12週間の筋力トレーニングがストレス時の生理反応に及ぼす影響—」

堤 俊彦 (ボストン大学教育学部発達カウンセリング心理学科)

「高齢者の道路横断時の運動特性」

松井 敦典 (鳴門教育大学生活・健康系)

「自閉症児の系列動作タイミングにおける練習効果」

乾 信之 (鳴門教育大学)

星川氏は、運動中に音楽聴取などの精神作業が主観的運動強度 (RPE) を低下させるという従来の研究では生理指標が心拍数に限られている点を指摘し、新たに血圧、換気量等の他の指標を加えて検討した。結果として、カラーワードテストによる精神作業を課した場合、アドレナリン濃度、心拍数の増加にもかかわらず、RPEが減少することが分かった。これを精神作業への注意の増大によるものと推測している。今後、精神作業の好みやストレス価などの質的・量的な検討を期待したい。

堤氏は、高齢者の12週間にわたる筋力トレーニングがストレス低減に有効に働くかを検討した。結果として、筋力、体脂肪率を有意に改善させたが、最大酸素摂取量には効果は見られなかった。またストレス課題時には血圧反応の改善がみられ、これを筋力トレーニングが認知過程に働きかけ、自己効力感が増したことによると意味づけている。心理要因は間接的であることが多いが、心的構えによる制御可能性も大きな価値があるの

で、これらの因果関係をさらに確認していただきたい。

松井氏は、高齢者の道路横断時の交通事故死亡率が高い現状について、判断力と運動特性の観点からその要因を検討した。主な結果として、自動車の速度が40km/hを越えたときの見えが過小評価されていることが分かった。今後、距離と特に奥行き速度認知能力の基礎データとの比較、また調整法などを応用してさらに検討していただきたい。

乾氏は、反応時間の遅延特性があるとされている自閉症児において、4日間のタイミング練習による見越反応効果を検討した。その結果、健常児、自閉症児とも、見越反応の練習効果は認められなかった。また自閉症児群としての変動が大きかったが、個人ごとにみると学習効果が認められた児童もいた。今後、特に個人の固有リズム等の観点から、リズムを変えるなどして被験者一人ひとりの一致タイミングの認知要因を探っていただきたい。





活発な議論が繰り広げられる発表会場

## ＜ポスター発表＞

演題番号 037養20501～037養20504 座長 工藤 孝幾（福島大学教育学部）

「キックスキルとEMGの関係(2) 一下肢筋に注目して」 堀野 博幸（防衛大学校）

「アーチェリー競技に関する生理心理学的研究—エーミングがEMGに及ぼす影響について—」

笠原 彰（作新学院大学）

「Sensory set 及びMoter setが予告反応時の心理的狀態に及ぼす影響」

平工 志保（学習院大学非常勤講師）

「運動負荷時におけるSPAと運動強度との関係」

中宮 敏之（早稲田大学人間科学部）

ポスター発表ということで、全体での討議をしませんでした。ただし、すべての報告者と直接意見を交換することができましたので、それを踏まえて個人的な感想を述べさせていただきます。

「キックスキルとEMG の関係」（堀野・山崎）

高技術者と低技術者の判定が大雑把すぎるのではないか。

EMG率という指標は時間的なパターンを分析するのに有効な方法であろう。ただし、率を算出するときの分母に相当する部分が小さいと、わずかな筋放電が結果を大きく左右することになってしまう。従って、今回の前頸骨筋における結果が「作用機序の明確な差」を意味するか否かについては、もうすこし慎重な検討が必要ではないか。

「アーチェリー競技に関する生理心理学的研究」（笠原、他）

「注意の分化」の考えに基づいた仮説の検証実験で、仮説とは全く逆の結果が得られたのに、その結果を再び「注意の分化」で説明するのは論理

矛盾である。今回の結果が意味するのは、環境との関連で動きが獲得されているという、生態学的な考え方の妥当性ではないか。すなわち、アーチェリー技術とは「的を狙う」ために「伸び合う」技術であって、これら2つの要素を単に統合することはできないということであろう。

「Sensory set 及びMoter setが予告反応時の心理的狀態に及ぼす影響」（平工・佐久間）

Sensory setとMoter setは確かに長年使われてきた概念ではあるが、「動きを考えずに動きで反応せよ」あるいは「音に注意しないで音に反応しろ」というのであるから、実験教示をやる際は常に不自然さがつきまとう。反応時間の結果についてのみ、「課題のやりやすさ」を考察の手がかりとしているが、CNVの結果についても同様の観点からの解釈を試みる必要はないだろうか。

「運動負荷時におけるSPAと運動強度との関係」（中宮、他）

この研究は、次の演題「運動負荷による発汗が

皮膚電位へ及ぼす影響について」とセットのものであり、この研究だけに対するコメントをするのは困難である。これらの2つの研究でめざしているのは、SPAを運動中の自律系覚醒水準の指標として用いることができないかということである。それには、運動を伴わない温熱性発汗のSPAに対する影響との比較検討が必要である。そのようなデータもすでにとってあるということなので、次の報告を待ちたい。



発表中の中宮敏之氏

演題番号 037養20505～037養20507 座長 堀野 博幸（防衛大学校）

「運動負荷による発汗が皮膚電位へ及ぼす影響について」 宮崎 順史（高崎商科短期大学）

「一過性運動の心理的効果に及ぼす身体的自己効力感の役割」 竹中 晃二（早稲田大学人間科学部）

前回大会より取り入れられたポスター形式での研究発表であるが、本大会でも口頭発表では困難であるきめ細かな討論が行われていた。このセッションは、発表演題が2つと演題数的には少ないものとなったことにより、逆に2題の研究報告に関する討論がより内容の濃いものとなったように見受けられた。

ここで、宮崎・竹中両氏の発表内容を概観したい。まず、宮崎氏の発表は、実際の運動場面における長時間のSPAを記録・解析した点で、非常に興味深いものであった。これまで、生理心理学的

手法を用いて、競技場面時における選手の心理状態を分析することは、測定機器の制約上、非常に制限されたものであった。これに対して、氏はエルゴメーターと走行運動負荷時にSPAを記録した。その結果として、運動強度が増加するに従いSPAが陽性方向にシフトするという知見を得た。この知見は、これまでの報告にはあまり確認されないものであり、主観的な「苦しさ」との対応していることも、今後の研究成果が大いに期待されるところである。次に竹中氏の発表では、一過性定脈運動の心理効果を身体的自己効力感との関係

から調べたものであった。実験結果から、自己効力感を高めるような手法により運動に対する心理的ストレスを低減させるとの考察がなされていた。これは、氏が指摘していたように、従来の体力科学で重要とされてきた種々の運動形態に加えて、心理学的手法が運動処方に貢献できる可能性を示唆したものであり、今後のさらなる研究の発展が期待される。

発表会場では、両氏の研究発表に対して、個別に活発な質疑応答が展開されており、両氏の研究

に対する関心の高さがうかがわれた。しかし、前回大会と同様に口頭発表がポスター発表に並行して行われていたためか、来訪者の分散が生じていたかに思われた。学会の運営に携われた方々のご苦勞とご工夫により、研究の領域などを考慮された発表時程となっていたことは十分に推察された。しかしながら、仮に時間や会場などの都合が許すのであれば、多くの研究者が興味ある研究発表に参加できるように、同時進行される研究発表数のさらなる抑制を要望したい。

演題番号 037養20508～037養20511 座長 竹中 晃二（早稲田大学）

「韓国のシャーマニスティックダンス“サルプリ”の演舞イメージにおける脳波特性」

朴 鍾蘭（奈良女子大学文学研究生）

「香りがアーチェリー選手の心理状態及びスポーツパフォーマンスに与える影響」

三澤 紗織（中京大学大学院）

「学習によって打球動作の状態空間はどのように変容するか？

—テニスのグランドストロークを課題として—

山本 裕二（名古屋大学）

「練習スケジュールと認知スタイルが運動学習に及ぼす影響」 工藤 孝幾（福島大学教育学部）

それぞれの発表ともポスター発表らしく和気藹々としたムードの中、活発な意見交換が行われた。以下は、4つの発表について、発表者の報告に基づいて発表概要としてまとめたものである。

「韓国のシャーマニスティックダンス“サルプリ”の演舞イメージにおける脳波特性」（朴・平井）

事故のために、急遽発表者が共同研究者に変更になった。この研究は、韓国の伝統的巫女舞として著名な「サルプリ」をイメージする課題として、イメージ時とイメージ前後の安静時の脳波変化を比較検討したものである。演舞イメージ開始前のFm $\theta$ が出現していることについての質問や測

定した結果の解析に関する質問が中心であった。最後に、踊りやダンスに関する研究では、男性の興味が薄れるなどの意見も出された。

「香りがアーチェリー選手の心理状態及びスポーツパフォーマンスに与える影響」（三澤・吉川・斉藤・綾部）

この研究は、アロマセラピーで使用されている精油の芳香を用い、香りがアーチェリー競技のスポーツパフォーマンスに与える影響を検証したものである。発表者への主な質問として、香りの効果、臭覚の時間的順応性の問題、実験設定の問題

点など、研究そのものよりもむしろ香りの研究一般についての質問が大半であった。発表結果が必ずしも肯定的なものを示していないものの、多くの参加者が今後の研究の価値を認めていた。この種の研究の今後の方法論についてさらなる検討が示唆された。



発表中の三澤沙織氏

「学習によって打球動作の状態空間はどう変容するか？」（山本）

この研究は、学習による動作の変容をダイナミカルシステムから検討を試みたものである。運動の学習を入出力変換の変容と仮定し、入力パターンに応じた出力パターンの出現を、テニスのグラウンドストロークを課題として研究を行っている。被験者の学習前後の動作を3次元DLT法によって肩及び前腕の角度、角速度を求め、その状態空間の変化を入出力変換の立場で検討している。今後の課題としては、どのような学習方法がこのような入出力変換獲得に効果的であるかが発表者および質問者の興味であった。

「練習スケジュールと認知スタイルが運動学習に及ぼす影響」（工藤）

この研究は、「文脈干渉効果」と密接にかかわると考えられる衝動型一熟慮型という認知スタイルとの交互作用を検討したものである。主に意見交換の対象になった問題は、練習試行における試行直前の「プランニング時間」と直後の「フィードバック情報処理時間」の結果の解釈に関するものであった。特に、ランダム練習よりもブロック練習の方が「フィードバック情報処理時間」が長いという結果は、これまでの文脈干渉効果に関する研究では報告されておらず、この現象についていくつかの解釈の可能性が話し合われた。「プランニング時間」や「フィードバック情報処理時間」といった時間的な長さが、どの程度文脈干渉効果に影響するのかを実験的に調べてみる必要があるのではないかという指摘があった。

演題番号 039養20501～039養20505 座長 楠本 恭久（日本体育大学）

「身体動作における言語教示に感ずる研究ー比喩的表現が動作に及ぼす影響についてー」

平井 敏幸（日本体育大学）

「行動変容技法を用いた企業内通信運動プログラムの有効性」

山口 幸生（福岡大学）

「アスリートの日常・競技ストレスに対する評価と精神的健康度との関係」

岡 浩一郎（早稲田大学大学院人間科学研究科）

「対戦相手の試合を見た段階での大学女子剣道選手の対戦相手の認知様式

ー自分の得意技との関係に注目してー」

三木 ひろみ（筑波大学体育科学系）

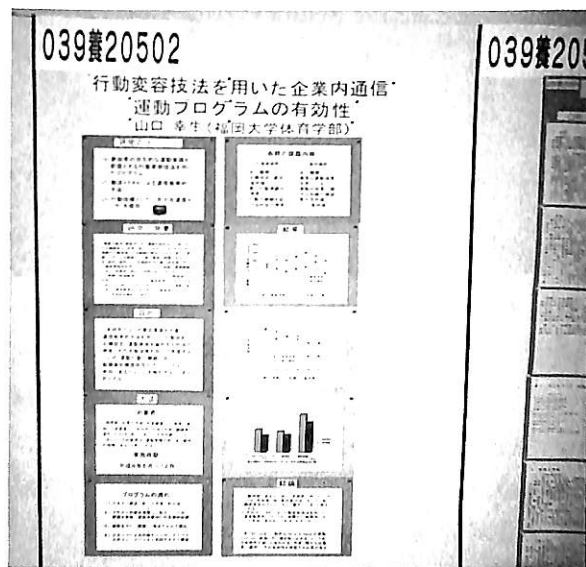
「高齢者の身体活動が抑うつ度、身体的自己効力感および生活満足感に及ぼす影響」

松尾 直子（早稲田大学大学院人間科学研究科）

平井氏の発表は、「比喩される言葉」と「比喩する言葉」に焦点を当て、言語教示に対する動作感覚について明らかにすることを目的とするものである。その方法において、SD法を使用している点が興味深い。この研究は、指導場面における、より有効な教示を探る試みである。この種の研究は、言語教示を与えられる側（対象者）の性別・年齢・言語理解能力・経験、そして、一種イメージ的な能力などが常に問題とされる。これらの点に配慮した研究が今後の課題となるであろう。

山口氏の発表は、「運動行動の継続」に焦点を当て、企業内通信運動プログラム（通信教育的手法を用いて、行動契約、目標設定、運動実施を疎外する状況の発見とその克服法などを自分で学習する）が一般健康知識提供型のアプローチより、有効であるか否かについて検討することを目的とする研究である。目標設定や行動の原則等を学ぶ〈行動変容技法〉を用いたカリキュラムの方が、

一般健康知識提供型のアプローチより、運動習慣の継続という点で、有効である可能性が高いことを指摘している。



ポスター発表会場



岡氏の発表は、アスリートの日常・競技生活で経験しているストレスと精神健康度との関連性について検討することにより、日常・競技ストレス尺度の妥当性を確かめることを目的としたものである。この結果から、「競技生活における人間関係」は怒りと、「自己に関する内的変化」は抑うつ・不安と比較的相関が高く、情動反応と結びつく傾向にあることが明らかにされた。このことは、日常・競技ストレス尺度の妥当性の一部を示唆している。

三木氏の発表は、対人競技における望ましい対戦相手認知の方略を探究することを目的に、大学女子剣道競技者の技の得手不得手情報がどのように考慮されているかについて検討するものである。その結果から、事前に相手の試合を見た段階では、ある程度の競技レベルの選手ならば、「相手の技の特徴や動作の特徴、癖といった細かな点に注目して対戦相手を把握し、対応策を考えるこ

とができるが、実際それを有効に実施できるかということになると、幅広い得意技を持った競技レベルの高い選手が有利であることが示唆された」ことを明らかにしている。

松尾氏の発表は、高齢者の日常における身体活動を3領域（家庭・運動・趣味）で捉え、これらの身体活動が抑うつ度、身体的自己効力感、生活満足度などの心理的側面にどのような影響を及ぼしているかについて明らかにすることを目的としたものである。その結果から、「身体活動の内容によって心理的側面への影響が異なることが示されたが、運動に伴う身体能力への自信の増加は、種々の活動実施への原動力になることが考えられ、高齢者の心身の健康維持・増進にとって特に運動活動の重要性が示唆された」ことを明らかにしている。

以上5題についてはそれぞれに特色があり、興味深く、今後成果の待たれる研究であった。

演題番号 039養20506～039養20510 座長 三木 ひろみ（筑波大学）

「TSMIの短縮化の検討 (1)」

谷嶋喜代志（都立世田谷工業高校）

「TSMIの短縮化の検討 (2)」

福田 将史（作新学院大学）

「スポーツ選手の催眠時における暗示語の研究(1)ースポーツ種目と暗示語の分析ー」

立石 泰久（日本体育大学）

「スポーツと呼吸(1)ー体育専攻学生の呼吸統制体験と意識ー」

楠本 恭久（日本体育大学）

「スポーツと呼吸(2)ー体育専攻学生の呼吸統制体験と意識・性差・統制法ー」

三村 覚（日本体育大学）

谷嶋氏と福田氏の発表は、昨年のY-G性格検査に続いてTSMI（体協競技意欲検査）を取り上げ、その実用上の問題と有効性を指摘し、短縮化の可能性を探るものである。TSMIは項目数も多く費用の

面からも実施するのが大変なテストだと日頃から感じていたので、谷嶋氏、福田氏らのTSMI短縮化の検討には期待している。ただ、TSMIの短縮化を検討する際には、TSMIが何のために作られどのよ

うに利用されることを考えているのかということも重要になってくるように思う。例えば、日本代表選手のTSMI結果が、統計的に一般選手よりも高いがスタナイン得点では中から中のやや上レベルにしかすぎないことが指摘されているが、TSMIでは競技意欲が上のレベルにある選手として日本代表以上の競技レベルの選手を想定しており、より高い競技意欲を備えた選手となることを目指して、日本代表選手もこのTSMIをまだ活用できる立場にあるとも考えられる。また、谷嶋氏、福田氏らが指摘しているように、他の尺度との間に低い相関しか見られなかったり競技レベルの差異を明確に反映できない尺度もあるが、TSMIが競技に対する選手の意欲（やる気）を多面的に見ることを意図したものであり、選手自身が自己診断の指標として、あるいは選手の競技生活をサポートする第三者がサポートの方法を考えるためのアセスメントの際に利用することを考えると、安易に削除はできないかもしれない。また、実用上の問題として、コーチ受容・対コーチ不適應の尺度があるために監督やコーチが活用できないことが指摘されているが、コーチとの人間関係を競技生活上の問題として挙げる選手が多くいることも考えると、この尺度の扱いには迷うところである。TSMIの利用目的や活用方法を考慮すると、今後検討していかなければならない点は多々あると思うが、今後とも是非検討を進めていただきたい。

立谷氏の発表は、催眠を用いたトレーニングの中で長田氏が用いた暗示語を分類・分析し、その暗示語にはクライアントの専門スポーツ種目の特性が反映されていることを報告している。独自の方法で成果を挙げているだけに、この機会にその秘訣の一端でも分かればと思ったが、そう易々と誰にでもできるというものではなさそうだという

ことが分かった。4名の被験者に対して共通の「哲学的暗示」と各スポーツ種目別の暗示語が与えられていたが、例えば、個人差の有無や、個人差があるとすればどのように考慮されているのか、同様のトレーニングを我々が行なう場合個々のクライアントとの事前のカウンセリングを通じてどのように適切な暗示語を抽出していったらいいか等、実施上の具体的な情報を提供してもらえたら大変参考になると思う。

楠本氏と三村氏の発表は、体育大学生の「呼吸統制」に対する意識と体験に関する調査結果を報告するものであった。呼吸法といっても多く挙げられていたのはリラックスを目的とした深呼吸であり、呼吸法が重要であるとは分かっているものの具体的な方法についてよく知らないという現状が確認された。しかし、三村氏の発表では、自由記述の回答からスポーツ種目に特有の特殊な呼吸法があることが示唆されている。特有の呼吸法について検討が進められている種目や、さらには呼吸相を調べることによって同じ種目でも運動・動作によって望ましい呼吸の仕方が変わることを指摘している研究もあることから、氏らの「スポーツと呼吸」の研究が今後どのように展開していくかが期待される。



発表中の谷嶋喜代志氏と座長の三木ひろみ氏

## 日本体育学会参加記

### 日本体育学会第48回大会に参加して

杉山 哲司（山梨英和短期大学）

今年の体育学会には、体育心理学を中心に出来る限り多くの企画に積極的に参加しようと、意欲

的に臨みました。しかし新潟にくる日の体調は万全ではありませんでした。そのため、10月6日に

新潟入りした夜は久保田も八海山も越の寒梅も口にすることはありませんでした。

学会初日の7日、まずまずの体調で新潟大学にいき、口頭発表をききました。第1セッションの細田先生の研究をはじめとする午前中の発表は、どれも興味深いものでした。個人的には佐々木先生のストレスの研究、賀川先生の行動規範の研究に興味をひかれました。質疑・応答の時間は限られていますが、幾つか質問することができました。午後は、「加齢に伴うスポーツ教育」というテーマの体育社会学シンポジウムに参加しました。青少年期、成人期、中高年期から人とスポーツとの関わりを大きな視点でとらえようというものでした。心理学的な視点とは異なりますが、演者の話の内容も全体の進め方もよく、聞いていて大変おもしろいものでした。

学会二日目、8日の午前、体育心理学シンポジウム「運動部における体育心理学領域からの諸問題及び研究課題」が中込先生の司会で行われました。ここでは阿江先生とお二人の演者の先生方のこの問題に取り組む真剣で強い意志が感じられました。話を聞いた夜は、これについて友人達と議論になり、いろいろなことを改めて考えさせられました。運動部に関連する問題は、体育心理学の領域でもっと熱心に取り組んでいくべきだろうと思います。午後は、大学体育連合企画のシンポジウム「大学体育の現状と危機」に参加しました。このシンポジウムの案内には、「大学体育・危機の一番の要因は？ 大綱化による必修枠の撤廃、任期制の導入による業績評価」に続いて、やや大きな文字で「いや、最も恐いのは若手教官が大学

体育の危機の現状に無関心なことです。」とかかれていました。質問しようか、などと考えながらシンポジウムをきいていました。フロアーからの質問の時間になると、すかさず若手の先生から、案内にかかれていた表現についての反論があり、少し盛り上がりを見せました。

三日目の体育心理学の口頭発表ではメンタルトレーニングに関するものがありましたが、このテーマに関する研究報告はまだまだ少ないような気がします。午前の最後はポスター発表に参加し、TSMI短縮化について、発表された先生方をまじえて数人の方々と意見交換をすることができました。私自身は著作権の問題はどうなっていくのかなあと疑問を抱いたまま、会場を後にしました。午後は体育方法の口頭発表で石井先生と、高見先生のアトランタオリンピックのコーチの調査についての発表をききました。今後のオリンピックで必要なことが、わかりやすくまとまっていますが、これらを競技団体の人がどう受けとめるかが大事なことだろうと思います。

いろいろな研究がありましたが、各先生方の熱意や苦勞が伝わってくるものが多かったと思います。最近では、携帯電話、インターネットなど情報を交換する場面はいろいろありますが、直接会っていろいろな情報を交換することは、人間関係を作るための重要な機会だと思います。私のほうは学会中の節制のかいもあり、体調も回復し、明日からの意欲と新潟の銘酒を胸に新潟を発ちました。発表された先生方、ありがとうございました。

## 体育学会に参加して

高橋 孝徳（順天堂大学大学院）

心地よい秋風が吹きはじめた10月初頭、7日から3日間体育学会が新潟で開催され、私も7日より参加させて頂きました。

私にとって体育学会へは初めての参加でありましたので多くの研究発表、シンポジウム、分科会を楽しみにしていたのは勿論の事、内心新潟の地への期待も心に抱きつつ、7日早朝に千葉(太平洋側)から新潟(日本海側)へと向かったのです。

前日は中島先生宅へ泊めて頂き、夜、景気付けにと美味しい新潟の酒を一杯？ご馳走になり、明朝4時過ぎには出発したのですが、渋滞やら、朝食、休憩などで着いてみたら11時過ぎ、一步出遅れてしまいました。ですが午後に他大学院の友人の研究発表があり、また他分野の発表も幾つか聞き、ここでやっと学会への参加となったのです。

夜にはOB会があり、各職場の現状、大学時代の思い出話など、ためになる話から当事者は触れられないくない過去の出来事までいろいろと話を聞かせて頂き、学会の楽しみの一面を味わう事が出来ました。しかしながら未だに不明な点が一つ。私が他の用事で席を外していた時の事、戻ってきたとき久保先生（愛媛大学）の眼鏡のレンズがはずれていたのです。一体あの後何がおこったのでしょうか？聞く事が出来ません。

2日目、3日目と多くの発表へ精力的に参加いたしましたが、2日目の午後、まるで台風が直撃したような大雨。特に雨が激しかった昼過ぎ、2時からのシンポジウムを聞く為、慌ただしくバスに乗り込み新潟テルサへと向かったのです。

「大学体育の現状と危機」は是非参加してみたいと考えていたのですが、先生方の報告、問題点や今後の政策などについて本当に考えさせられる、意義あるものでありました。

今回学会に参加して多くの先生方と接する事ができ、色々と話を聞かせて頂き大変有意義な3日間でありました。しかしながら研究発表では質問する事もできず、自らの発表もなかったので今度は是非とも発表したいと考えております。また、残念な事に他大学の院生との交流がまるでなかったもので、もし可能であるならば、次回には互いの意見やら考えなど話し合える機会を作りたいと思っております。次回開催は四国・松山。松山の地へ訪れる事を楽しみにしつつ、今回学んだ事を土台に次回の参加では更に有意義なものになる様今後頑張っていきたいと思いました。



平成9年度日本体育学会奨励賞を受賞する樋上弘之氏

受賞論文：樋上・中込・杉原・山口（1996）中・高齢者の運動実施を規定する要因：心理的要因を中心にして．体育学研究，41，68-81．



### Ⅲ．研究室および研究会活動の紹介

## 研究室めぐり（その5）

### 順天堂大学スポーツ健康科学部心理学研究室

星野 公夫，中島 宣行（順天堂大学）

#### 順天堂大学心理学研究室内の沿革

体育学部が創設された翌年の昭和27年に、故田崎 仁先生が就任した心理学研究室として第一歩が始まった。田崎先生のご専門は産業心理学であり、昭和37年に退職されるまで一般教養科目の心理学、教育心理学、青年心理学、教育原理も担当された。体育心理学については、宇土正彦先生が昭和29年～35年まで非常勤講師として講義をされた。

昭和36年に太田鐵男先生が体育心理学の担当教員として就任し、翌年、加賀秀夫先生を迎えた頃から、体育心理学、スポーツ心理学領域の本格的な研究・教育がスタートした。45年に、久保玄次先生と岩淵忠敬先生が助手として着任し人的条件も整った。太田先生はあまりにも客観的・普遍的な科学としての心理学は、人間の主体性や意識現象を軽視しトータルな人間を対象としていないと常に指摘され、方法論的な袋小路に入り込んでいた体育心理学の立て直しを試みた。研究室の主要テーマを「身体像」に限定し、臨床的に十分応じられる知見を得るための模索が始まった。

この間、トヨタ学術振興財団からの科学研究費の補助金を得て、可動ルームによるスペース・オリエンテーションの研究も緒についた。それと同時に、本研究室はキャンパス内での高度な人間性の開発を目的とした心理相談を行い、各ケースに

応じて、催眠、自律訓練法、リラクセーションなどの技法を用いながら効果をあげてきた。この心理相談とともに併用した様々な心理療法の底に流れている共通点は「からだを整えることによってこころを整える」という東洋古来の心身相関の考え方であり、これは太田先生が退職されてから現在に至るまで本研究室に脈々と伝わっている基本的姿勢である。

昭和48年に久保先生が、49年に加賀先生が退職された後、49年に中島宣行が、54年に星野公夫が着任した。

昭和63年4月、順天堂創立150周年記念事業の一環として、体育学部が習志野キャンパスから現在のさくらキャンパスに移転した。平成3年に初の女子学生が入学し、学部の改組転換が文部省に認可され平成5年には、スポーツ健康学部が発足した。新学部はスポーツ科学学科、スポーツマネジメント学科及び健康学科の3学科からなり、本研究室はスポーツ科学学科に所属することになった。その後、研究室の見直しがあり現在は、星野がスポーツ心理学研究室、中島が体育心理学研究室を開講している。しかし、授業等色々な面では協力体制をとっている。この2名に加えて、一般教育の心理学担当の岩淵忠敬助教授と障害児心理の飯島正博講師の協力を得ている。

## 教育の概要

学部の特設教育課程のカリキュラムでは、スポーツ心理学、スポーツ選手のメンタルトレーニング、スポーツカウンセリングを初め、教職科目の教育心理学、教育相談、カウンセリング、青年心理学、ゼミナールを担当し、大学院スポーツ健康科学研究科では、体育・スポーツ心理学特講、体育・スポーツ心理学特演、体育・スポーツ社会学研究法実習を開講している。その他、星野は学生相談室の室長として、中島は室員として、学業や進路、性格や能力、対人関係、クラブ活動等学生のさまざまな問題や悩みに対するサポートを行っている。

## 所属学生

本学では、3年次よりゼミナール制をとっており、平成9年度では、星野、中島両ゼミナールで、3年生16名、4年生11名の計27名所属しており、11月に行われる学園祭での研究発表と卒業研究とを義務づけている。

ゼミナールの指導のあり方では、星野と中島では、指導の過程に互いの特色を示している。

星野は、ゼミ員間での動作法の練習を通して、ゼミナールで得た動作体験を基として、日常の競技生活場面での、注意集中、意欲、不安、気づき身体の自己コントロール等に対するゼミ員の実感の変化を中心として、スポーツ心理学に関する諸問題への関心を高めようとしている。

中島は、スポーツ心理学のテキストを用いて、基礎的な立場から、スポーツにおける動機、意欲、性格、不安、注意、認知等の心理的な諸問題への関心を高めようとしている。

ゼミナール配属の際にはいずれの研究室へも希望者が多く、指導上の点から、希望者の全員を受け入れられないのが残念である。

大学院生は3名いる。指導教員の星野は動作法

を用いた臨床研究を行っているが、修士論文では、体育・スポーツに関する実験研究を行うよう指導している。10年度に向けては、動作法を独立変数として、帰属、認知スタイル、体操競技の技術等に関する研究がなされている。

その他、研究生が1名所属している。

## 現在の主たる研究

星野は、従来より、動作課題の解決を通して心理的側面の改善を図る動作法による臨床研究を行っている。内容としては、脳性まひ児の動作の改善、重度心身障害児・自閉児・多動児等の行動の改善、スポーツ選手の技術習得の基礎としての動きや気づきの改善に関する問題を扱っている。

最近では、言語面接による心理療法に変わって、動作へのアプローチを通して心理的な変容を図ることに関心を持っており、心因性疼痛、摂食障害等について動作法を試み効果を示している。

スポーツ選手については、従来より、運動技能の向上とともに、不安、注意集中、イメージの変化、動機づけ、自信、意欲等さまざまな心理的側面に変化の生ずることを認めている。

これらの事例を基盤として、姿勢の改善の運動技能及び心理的変容におよぼす影響を検討している。それとともに、姿勢の改善の心身への影響のプロセスも今後の課題となる。

また、動作法のより幅広い発展を目的として、今年度よりスポーツ動作法研究会を発足させた。

中島は、最近、スポーツ選手の集中力、認知スタイルの研究を継続するとともに、身体活動とメンタルヘルスの関係についても、他領域の研究者達と共同研究を進めている。

主な研究活動としては以下の通りである。

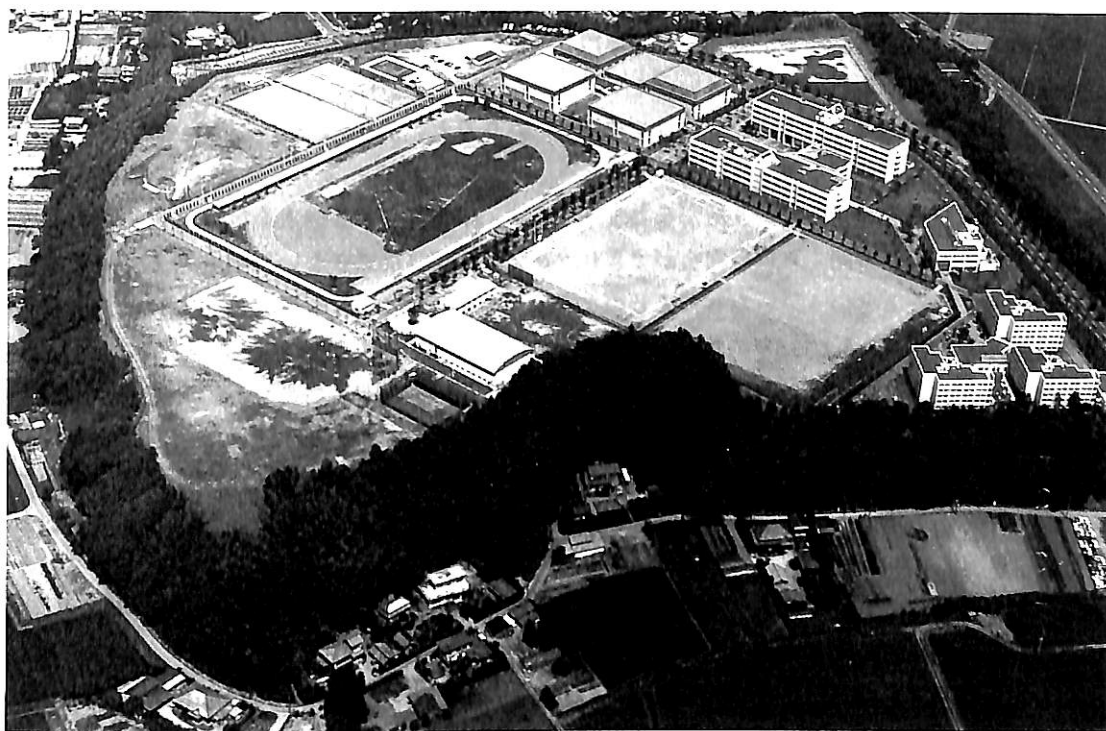
・平成2～4年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告—チームスポーツのメンタルマネジメントに関する研究：第1～3報

・平成6～8年度 自転車による健康づくりメンタルヘルスに及ぼす効果：Ⅰ～Ⅲ

・平成5～7年度 騎手としての適性に関する研究：平成4～6年度報告

その他、現在、文部省科学研究費補助金（基盤研究C2）を共同で4件（状態不安とパフォーマンスの関係について）、順天堂大学学内共同研究

1件（集中力と認知スタイルの関係について）を手がけている。



## 研究会紹介

### 「スポーツ社会心理学研究会」スタートのお知らせ

阿江 美智子（東京女子体育大学）

一昨年、スポーツ心理学会で、体育心理学専門分科会所属の研究領域の似ている（というか年齢の似ている）3人で社会心理学ワークショップを開催したのが縁で、少し仲間を募って、社会心理学的な研究の情報交換をしたらという話がまとまりました。その後、年に一回くらい研究会ができれば研究の刺激にもなるという、いたってまじめな方向で話が進み、いよいよ1998年の体育学会の期間中に第一回研究会を開こうという所までこぎつけました。

今回、事務局から研究活動の紹介の欄に加えて頂き、関心のある方々にお知らせできることを大変有り難く思っております。

さて、スポーツ社会心理学研究会は、現在11名ほど参加したいという意志のある方を確認しております。会の内容は研究発表と自由な意見交換（この点がとても重要だと考えております）で、色々な発想の考え方を聞いたり、話したりしながら、自分の研究につなげていけたら、という会にしたいと思っております。研究内容は当然社会心理学的

な発想のものに限定したいと思っております。対人関係、集団行動、社会的行動、個人と社会の関わりなど、社会心理学そのものが近年クローズアップされています。私達の対象とするスポーツ・体育事象でも個人を社会的視点から見ていかなければ解決できない事柄も増えていると考えられます。そのような研究に関心をお持ちの方や、他領域の方も歓迎です。

まだ、本格的に活動していないのでどのような内容になるかわかりませんが、関心をお持ちの方は直接事務局に連絡下さるか、体育学会のときにも声をおかけください。どうぞよろしくお願い致します。

文責 阿江 美智子（東京女子体育大学）

事務局は島根大学 伊藤豊彦

TEL&FAX 0852-32-6339

E-mail itotoyo@edu.shimane-u.ac.jp  
です。

## 大阪心理技術研究会の活動状況

船越 正康（大阪教育大学）

U-K法の始祖・内田勇三郎氏が逝去した1966年以後、日本精神技術研究所から独立して小林晃夫師が東京心理技術研究会を創設した。併行して活動を始めた長野に続いて、1972年以後は大阪心理技術研究会が柏原建三会長の下で人柄判定初級講習会の開催を皮切りに学校教育関係を中心として「U-K法を通じての人間理解」を深める努力を続けている。昨年の活動状況と今夏までの予定は次の通り。

1997年4月18日：市立香芝東中学校のU-K曲線  
同中・松田勝也教諭、  
参加18名  
6月13日：U-K法からみた箕面自由学園  
高校の特色、  
日高・島本葉子教諭  
22名参加  
7月1～2日：大阪教育大学平野付属小学校  
児童の曲線判定会25年目  
延30名参加  
8月8～11日：人柄10類型初級判定講習会  
アピオ大阪労働会館27名参加  
9月19日：前頭日突発波とU-K曲線、  
山形大学、丹羽健市教授、  
17名参加  
9月29・30日：前記平野付小担任との面談  
11月28日：コーチングとU-K利用～  
全日本柔道強化選手の指導事例

船越、15名参加

1998年2月13日：○法を用いての幼児理解、  
常盤会幼稚園・中村妙子、  
田中宏子教諭、16名

4月17日：曲線型とランニング中の心理  
状態、

甲子園大学・滝省治助教授

6月12日：全柔連強化選手26年間849名  
のU-K分析、府立住之江高校・  
貴志孝伸講師

8月4～7日：人柄10種類初級判定講習会、  
アピオ大阪労働会館

以上の通り、2月に1度の研究会は夜7時から9時、1演題につき1時間半の発表と討論の検討で楽しんでいます。関心のある方は下記宛へ御一報下さい。

事務局：〒547-0031 大阪市平野区南4-6-7

常磐会短期大学内大阪心理技術研究会

鷺尾紘子、大黒敏春、TEL.06-709-3170

FAX.2201



## スポーツ動作法研究会

星野 公夫（順天堂大学）

成瀬悟策を中心として、我が国で開発された動作法は、従来の心理学の発想とは相当に異なっているためか、臨床効果は相当に高いにもかかわらず、多くの心理学研究者からなかなか理解されにくいものであった。

そのような中で、脳性まひ児の動作の改善、自閉児や多動児等の情緒障害児の行動の改善、重度重複の心身障害児の行動の発達等を図る際の効果的指導法の一つとして、動作法は障害児教育の実践の中で、確固たる位置を占めるようになった。

また、心理臨床の中では、ここ数年に渡って、心理臨床学会等で動作法にいたる効果的な事例が発表されるにつれて、動作法への関心が高まり、ワークショップへの参加者が激増している。

そのような情勢の中で、臨床動作学会が成立されるまでになった。言葉や、洞察を中核とする心理療法に対して、動作課題の解決課題の解決課程における動作体験という、生きる実感の変化を通して、心理的な変容を図ることを研究の課題とするものである。

スポーツ心理学では、筆者が十年以上に渡って動作法の事例を報告してきたが、競技スポーツ選手を対象とした点と、筆者の浅学非才もあって、広くには知られなかった。

しかし、最近になると、小数ではあるが、若手の体育・スポーツ心理学研究者やコーチ学関係者の中に、動作法に対する関心が見られるように

なってきた。

そこで、私自身も動作法研究の仲間が増えることは望ましいことなので、本学心身障害心理学担当の飯島講師とともに、動作法でマスター論文を書いた本学心理学大学院卒業者や院生の協力の下に、「スポーツ動作法研究会」を発足させることにし、本年の3月1日に第一回の研究会を開催した。この研究会の開催には、セントラルスポーツのご援助を得て、セントラルフィットネスクラブ市川で行った。また、大塚製薬のご援助もいただき感謝している。

### 参加者

動作法はまだスポーツ関係者には広く知られていないにも関わらず、

日体大の長田先生、日大の花沢先生、また、遠くは中京大からの参加者も含め、14名の参加者があった。

### 内容

研究者が動作法を実施し、事例を通して、その際の工夫や、効果、問題点等を具体的に検討しつつ、本法の発展を図ることが本会の目的である。しかし、臨床活動は、技法を本で読んで知ればできるという訳には行かない。技術を身につける必要がある。

そこで、第一回は、星野が、動作法の概略を説明した後、参加者同士でグループをつくり、お互

いに練習しあった。

練習では、パフォーマンスに気を取られるのではなく、訓練者は、相手が身体を動かす際の感じを自分の手を通して感じ取ること、被訓練者は、自分で身体を動かす際の、自分の気持ちの動きや身体の感じ等を「実感」することを強調した。

心理学の観点からの身体及び動作への気づきの重要性を認識することをねらったものである。

ほとんどの参加者が、身体をリラックスすると楽になるとか、無駄な力を入れずに座れるようになると、気分がさっぱりするなど、身体と心との関係の中での動作体験をしたようであった。

また、ほんの少し、身体の動かし方を変えただけで、身体がしっかりするという体験を通して、今まで、あまり取り上げなかった身体の動かし方

の重要性に目を向けたようである。今回、話しの中ではきちんと踏み込めるという表現をしたが、動作を行う際の、身体軸を考慮しながら動作を行う必要性を実感できたのではないと思われる。

今回は、講習会のような形式となったが、2回目又は3回目の研究会からは、技術の向上を目指すとともに、事例を取り上げ、そこでの諸問題を検討するつもりでいる。

事務局 〒270-1695

印旛群印旛村平賀学園台1-1

順天堂大学 スポーツ動作法研究会

飯島 正博

TEL & FAX 0476-98-1033

## 運動学習研究会について

麓 信義（弘前大学）

この会は運動の制御と学習に関心のあるメンバーが集まり1990年に結成され、翌年に第一回の研究会を一泊で行い、以後、研究会を泊まりがけで開催しています。この会の特徴は、毎回の研究会の発表内容だけではなく、発表に対するコメントとそれへの発表者の反論まで含めた報告書を出して、相互の研鑽の場としていることです。この形式は2回目の報告書から変わらない体裁です。

また、当初はPC-VAN、現在では筑波大学の吉田茂さんの力でインターネットを用いた情報交換を多数の会員の参加で行っています。

現在の会員数は約60名で青森から沖縄までに散

らばっています。成文化された規約は何もありません。唯一の会則らしいことは、はじめの結成集会で私が言い出しっぺだったので世話人になったことと、はじめての研究会の後の今後の方針を決める会合で、はじめは千円、現在は2千円の会費を決めたことぐらいです。

最近の情報化の進展にあわせて、本会でも名古屋大学の山本裕二さんの力でホームページを開設し、会の主旨や入会の申し込み先を案内しています。そのホームページを使って、会員のために欧文誌の読書会をやらうとはじめたところです。

入会の申し込みは、もう少し詳しい会の案内が

掲載されているホームページ (<http://www.htc.nagoya-u.ac.jp/~yamamoto/jmls/indexjmls.html>) を御覧下さい。

インターネット未加入の方は、私か名古屋大学の山本裕二さんのところへ御連絡下さい。

## 臨床スポーツ研究会

中込 四郎 (筑波大学)

毎年、体育学会の中日の夕方から開催されている本研究会は、7回を重ねました。事例報告を中心とした2つの演題について、それぞれおよそ1時間半をかけてじっくり討議しようといった主旨で行なわれてきました。星野・中込が会の代表となり、事務局を筑波大学が担当しています。研究会を発足した7年前(富山大学・体育学会)と比較しますと、臨床スポーツ心理への関心が深まり、メンバーの中でも臨床活動の実際に触れる者が増えてきているようであります。本会への会員登録は100名近くにおよび、毎回40～50名の参加がなされております。ここ2、3年は学会会場での会場確保が困難となり、別の研修施設をお借りして実施しております。

昨年(2006年)の体育学会(新潟大学)期間中に行なわれた第7回臨床スポーツ心理研究会は以下のプログラムで行なわれました。

### (1) 高妻容一先生(近畿大学)

「'95福岡ユニバ金メダルのサッカー日本代表へのメンタルトレーニングと心理サポート：教育的スポーツ心理学の立場からの現場への応用」  
コメンテーター：中込四郎(筑波大学)

### (2) 土屋裕睦(大阪体育大学)

「“メンタルトレーニングに興味がある”と言って来談した大学新入部員との面接」

コメンテーター：鈴木 壯(岐阜大学)

それぞれの事例について、50分ほどで報告をいただき、その後、3、40分の討議がなされました。前者の事例報告では、チームスポーツへのメンタルトレーニングの適用について、具体的資料をもとに語られました。「心理サポートの要請、経緯」「トレーニングの継続、時間の確保」「試合期間中のトレーニングの工夫」「現場指導者との連携」などの側面に対しても、いくつかの貴重な示唆をフロアーに与えました。後者の事例は標題からもわかるように、当初メンタルトレーニングに興味があるということで自発来談しました。しかしその後、「部活が嫌になっている」といった訴えがあり、さらに、その背景にある自身の中でいくつかの不安に直面していききました。そして徐々にクライアントがそのことを受容できるようになっていき、再び積極的に部への参加を果たしていききました。

事例を提示していただきました両先生に、この場をかりまして再度お礼申し上げます。

以前から体育学会時だけでなく他の機会にも研究会を開催してはどうかといった希望が強いのですが、なかなか実現出来ないのであります。また、規約等も明確に定められておらず、かなりオープンな研究会として歩んできました。しかしこのこ

とが原因して、当日の会の事例検討の深まりに抑制をかけてしまっていることも感じられます。会の目指す方向性をそろそろはっきりさせる時期にさしかかっているようです。

事務局：〒305-8574

茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学体育科学系内

中込 四郎

TEL0298-53-2686



## .1997年度 メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学会 研究会報告

高妻 容一（近畿大学）

「研究」と「応用」の架け橋/現場での応用/競技力向上を目的とした情報交換会であるこの研究会は、本年度（4月第33回・3月第43回）も毎月1回の開催と専門分科会を2カ月に一回開催した。参加者も延べ3000人を越え、毎回80-130名が参加している。研究会の内容は、前半を講習会形式で行

い、現場ですぐ活用できるひとつの話題を1年間継続して紹介した。今年は、大リーグエンジェルスや米国野球代表チームのプログラムである「大リーグのメンタルトレーニング」（ベースボールマガジン社）の内容を毎月1章づつ詳しく説明した。後半は、現場でメントレを活用しているコーチや

選手を特別ゲストに迎え、現場での活用法などについて紹介してもらった。特別ゲストには、全国選抜卓球大会優勝選手、マラソンオリンピック代表選手、精神科医、オリックスのイチローの元打撃投手、高校野球部監督、兵庫教育大学内地留学中の高校教師、陸上部監督などで、話しの後には質疑応答など討論を実施した。5月にはメンタルトレーニング・サミットと題して、国際メンタルトレーニング学会会長のテリー・オーリック氏（カナダオタワ大学）を特別ゲストに迎え、メンタルの質の向上を目的にした国際講習会を実施した。また春・夏休みに1日（9時間）・2日間（18時間）集中講習会（初級・中級）も実施した。7月に

はイスラエルで開催された国際スポーツ心理学会に1名が参加、8月にはスウェーデンで開催されたフォーラム国際教育制度（ライセンス実施研修70時間）に4名が参加し、9月には米国で開催された国際応用スポーツ心理学会に7名が参加して国際的な情報を収集しその報告をした。本年度も研究会の毎月開催と5月には米国のケン・ラビサ氏/トム・ヘンソン氏を特別ゲストで招待する。

事務局：近畿大学教養部 高妻容一

TEL：06-721-2332（内3163）

FAX：06-726-1191 参加自由

#### IV. 日本体育学会第49回大会の案内



# 1. 日本体育学会第49回大会（愛媛大学）の内容案内

## 1) キーノートレクチャー

日時 10月5日（月） 13:00～14:00

会場 愛媛大学 共通教育・講義棟1F（C11）

テーマ 今、求められる健康スポーツの心理学的意義

—運動心理学の視点—

司会 中込 四郎（筑波大学）

演者 竹中 晃二（早稲田大学）

## 2) シンポジウム

日時 10月6日（火） 9:00～11:00

会場 愛媛大学 共通教育・講義棟1F（C11）

テーマ 大学・大学院における「体育心理学」教育の課題および  
ネットワーク化

司会 佐久間 春夫（奈良女子大学）

演者 吉田 茂（筑波大学）

近藤 明彦（慶應義塾大学）

荒木 雅信（大阪体育大学）

石井 源信（東京工業大学）

## 3) 総会

日時 10月6日（火） 11:00～12:00

（シンポジウム終了後）

会場 愛媛大学 共通教育・講義棟1F（C11）

# 今、求められている健康スポーツの心理学的意義

## —運動心理学の視点—

竹中 晃二

(早稲田大学人間科学部)

### 運動心理学, 健康スポーツ, メンタルヘルス, 高齢化社会

春先のぽかぽかとした日和の中, テニスや草野球に興じる情景を思い浮かべてほしい。暖かい太陽の下, 身体を自由に動かす開放感とプレイの内容に一喜一憂する仲間とのふれ合いは, 日常の決まり切った生活から解放してくれる楽しい経験である。公園で遊ぶ親子のふれ合いもまた, 縄跳びや遊具による身体活動を通じて増強される。町には市民ランナーの姿が増加し, テニスやゴルフの教室, フィットネスクラブの盛況ぶりは, 世の中の不況とは異なる次元で進行しているように思える。そこには, 身体そのものの健康志向が定着したように見えるものの, 実はストレス解消などの心理的效果を身体運動を用いて求める人たちが増加している現実がある。スポーツや運動に心理学的恩恵を求めるニーズは確実に広がっているのである。

欧米では, 健康スポーツや運動そのものの心理的效果を研究する学問を「運動心理学 (Exercise Psychology)」と呼んでいる。たとえば, A型行動パターンの研究で著名なBlumenthalは, ジョギングやウォーキングを用いたA型行動パターン変容効果や不安・抑うつ低減効果について多くの研究がある。このように, 運動心理学に属する研究は, 単に体育・スポーツの研究者だけが行う研究ではなく, 広く心身の健康に興味を持つ多くの研究領域の人たちによって行われている。本レクチャーでは, 以下の項目を研究の背景と捉え, 運動心理学の具体的な内容を紹介する。

### メンタルヘルス, ストレス対処に 果たす身体運動の役割

テクノロジーの急速な発展は人類に多大の恩恵を与えた一方で, 日々の生活はきわめてストレスの高いものとなっている。わが国においては詳細な統計は存在しないものの, 米国では, 医療機関に入院する総日数のうち30%はうつ病や不安神経症などのメンタルヘルス問題が原因であると言われている (Weinberg & Gould, 1995)。そのため, メンタルヘルス問題に関しては, その対処とは別に, 予防的観点からの取り組みも注目されるようになってきた。その一つとして, 近年, 大きな脚光を浴びてきたものに身体運動やスポーツ活動がある。運動は, 現代人の運動不足に起因する疾患の予防だけでなく, 現在ではその心理的な効果が期待されている。その恩恵は, 一方ではメンタルヘルスやストレス対処のための実際的な予防措置として利用され, 他方ではうつ病, 不安神経症などの感情障害の治療としても注目されている。特に, 身体運動を感情障害治療に用いるメリットは, 薬物と比べて副作用がないことや低コストで行われる点にある。身体運動が果たすメンタルヘルスへの影響やストレス対処効果については, 公な立場からの見解が示されてきた。その一つは, 全米メンタルヘルス研究所専門委員会での統一見解である (Morgan & Goldston, 1987)。

### 高齢化社会を見据えた身体運動の必要性

わが国に限らず, 平均寿命が年々上昇している現在においては, 世界的規模で高齢者対策に議論が集中するようになってきた。その内容も, 介護や看護といった処置色の強い議論から, 高齢者がいつまでも生き生きとした生活を送れるように配慮したライフスタイルに関するものに関心が移ってきた。世界保健機構 (WHO) は, 1996年8月に開かれた第4回身体活動, エイジングとスポーツに関する国際会議において, 高齢者に対する身体活動のガイドラインを初めて公表した (Chodzko-Zajko, 1997)。このガイドラインには, 身体活動を行うことによる恩恵を, 生理的, 心理的, そして社会的な3種類の恩恵に分類している。特に, 心理的恩恵に関しては, 効果を短期的および長期的恩恵に分け, 短期的恩恵では, リラクセーションの強化, ストレスおよび不安の低減, 気分の強化の3点を挙げている。一方, 長期的恩恵として, 一般的安寧の獲得, メンタルヘルスの改善, 認知機能の改善, 運動の制御とパフォーマンスの向上, 技能の獲得の5点を示した。一般に, 私たちが知っている身体運動の恩恵は, 主に予防医学や運動生理学的見地から得られた知見である。しかし, WHOが初めて運動に関する具体的なガイドラインに運動の心理・社会的恩恵を示したことは, 世界的にも深刻化する雇用不安などの現在のストレス社会における対応として大きな意味をもっている。

### 体育指導から健康教育的援助へ

現在, ある市の保健センターが, 市民のライフスタイルの改善を目指して, 身体運動プログラムを核として, 健康教育カウンセリングを加えた「健康エクササイズ事業」を始めた。私たち早稲田大学グループは, この事業に企画段階から関わっており, 様々な助言・提案を行ってきた。その中には, 日常生活における波及効果として, 身体活動量の増加やメンタルヘルスの改善など, 運動心理学的視点を盛り込んだ評価が計画されている。従来, 市町村などが行うこの種の事業は, 事業終了時の生理的效果, たとえばコレステロール値や体力指標の評価にのみ注意が払われてきた。私たちは, ストレスに「備える」という予防措置としての身体活動の役割をしっかりと凝視しつつ, この事業を推進しようとしており, 今後の地方公共団体における保健事業の見本となりうると自負している。

### 参考文献

- 竹中晃二 (編) 1998 健康スポーツの心理学 大修館書店。
- 竹中晃二 1998 運動・スポーツセラピー。上田雅夫監修, 山崎勝男, 谷口幸一, 吉川政夫, 竹中晃二編 「スポーツ心理学ハンドブック」 実務教育出版 (現在印刷中)。
- 竹中晃二 1997 健康と運動。島井哲志編 「健康心理学」 培風館 pp.111-123。

## 大学院における「体育心理学」教育・研究のネットワーク化

○ 佐久間春夫 (奈良女子大学)

### 【はじめに】

今日なお進行中である各大学の制度改革の中で、体育、スポーツ心理学の指導がどのように位置づけられ、行われているのか。特に、高度化、専門化の名のもとに大学院の設置、改組がなされ、高学歴のまた多様な背景を持つ大学院学生が増えてきている中で、各大学が目指している体育、スポーツ心理学の教育・研究システムや、抱えている問題点などについて情報交換をはかり、それぞれの制度の目標を達成できるような教育研究のネットワーク化の内容について、教育・研究内容と学位基準などの面から紹介する。

### 【本学大学院の概要と専門教育】

奈良女子大学においては、文学部人間行動科学科の中にスポーツ科学専攻が位置づけられている。この学科は教育学、哲学、心理学、スポーツ科学などから構成されており、2回生から各学科専攻に所属するシステムになっている。

従来の各学部の上にあった大学院各研究科が、平成10年度から人間文化研究科（博士前期課程・博士後期課程）といった区分制大学院に改組された。博士前期課程は10専攻からなり、各学部の学科専攻を延長した形態をとっており、従来の修士課程（昭和39年から43年の間に設置）に相当する。しかし、博士後期課程は、学際的な研究交流を推進する立場から諸学問間の融合を図ることを名目に、わずか3専攻の構成である。スポーツ科学は、数学、物理、社会学、福祉学、生物学、地理、経営学などと共に複合領域科学専攻（教官数59名）に属し、心理学と共に同専攻の人間行動学講座に属している。この講座はスポーツ科学7名と心理学5名の教官から成っている。現在、後期課程のスポーツ科学に属する学生数は1回生4名である。

この後期課程のスポーツ科学分野には、比較スポーツ文化史論、スポーツ社会論、スポーツ行動文化論、リズム表現行動論、スポーツ生理学、身体運動制御論、比較運動文化論と、体育心理学あるいはスポーツ心理学領域としての運動心理学が開講されている。その教育・研究内容としては次のような紹介がされている。

### <運動心理学>

競技スポーツ、健康志向スポーツといった身体運動がもたらす心理的効果とそのメカニズムについて、精神生理学的観点から考察する。特に、認知機能と身体活動、情動のコントロールにおけるバイオフィードバック、運動学習やトレーニングにおけるイメージ機能などの問題を論述していく。

### 【学位取得の基準】

在学期間内に学位取得を可能とするために、モデルケースとして次のような研究計画が設定されている。

1年次 4月 指導教官決定、博士課程研究計画書提出

講義受講登録（講義及び研究指導を受ける）

↓

1年次 10月 研究進捗状況のチェック

↓

1年次 2月 研究経過報告

↓

2年次 4月 講義受講登録（講義及び研究指導を受ける）

↓

2年次 10月 研究進捗状況のチェック

↓

2年次 3月 研究報告書提出

↓

3年次 4月 博士論文執筆計画書提出（指導教官全員に提出）

博士論文提出予備資格認定

講義受講登録（講義及び研究指導を受ける）

「博士論文執筆指導」受講登録

↓

3年次 6月～9月にかけて博士予備論文提出

↓

3年次 9月 博士予備論文の審査（中間発表、指導、執筆許可）

↓

3年次 12月 （1月上旬）博士論文提出（博士論文審査）

↓

3年次 3月 課程博士学位取得

### 【終わりに】

体育、スポーツ心理学は、非常に広範囲の研究領域と多様かつ細分化されたアプローチを有している。どこの大学で、どのような研究がなされているのか、そして学位取得と“出口”の問題など、このような情報の交換が活発になされることを期待したい。既に一部では行われているが、体育心理学に関する情報のデータベース化とそれらのインターネットによる活用により、随時、講義や研究に関する論議の展開が可能となるような環境整備の充実を期待したい。

## 大学・大学院における「体育心理学」教育の課題およびネットワーク化

## — 筑波大学における現状と課題 —

筑波大学 吉田 茂

心理学は体育・スポーツと多面的にしかも深く関わっており、大学・大学院教育にとって大きな意義を持っている。しかし、さまざまな制約から現実的に対応しきれない状況もある。この抄録では、まず事前資料として、主に筑波大学の体育心理学教育の概要を紹介し、次に大学院を中心に教育上の課題とネットワーク化への私見・偏見を少し述べる。

## 1. 筑波大学の体育心理学教育

各教育組織の教育目標（抄）、専攻（領域）、体育心理学関係の授業科目、体育心理学の担当者数と学生数を記す。なお本学は3学期制、授業時間は75分である。

## (1) 体育専門学群

- ・教育目標：優れた運動技能と幅広い運動経験を持ち、保健と体育・スポーツに関する総合的知識を備えた、指導力と活力に富む人間性豊かな指導者を養成する。
- ・専攻（領域）：2年次に健康・スポーツ教育、健康・スポーツマネジメント、スポーツコーチングの職業対応型の3専攻に別れ、かつ、3年次に卒業研究領域に所属する。
- ・授業科目：体育心理学、運動学習指導の心理、スポーツとメンタルヘルス、メンタルトレーニングの原理と方法、体育心理学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、体育心理学実験
- ・担当者：3名
- ・学生：3年生12名、4年生13名

## (2) 体育研究科（修士課程）

- ・教育目標：現代の科学・技術の発展を踏まえ、学校や社会における現場の保健体育・スポーツの諸問題を合理的に解決し、科学的に処理できる高度な職業人を養成する。
- ・専攻：体育方法学、コーチ学、健康教育学、スポーツ健康科学
- ・授業科目：知覚運動学習論、スポーツと人格形成、体育心理学調査・実験計画法、体育心理学演習、体育心理学実験、スポーツカウンセリング論、スポーツ競技の心理学、スポーツ参加の心理学、運動学習論演習
- ・担当者：3名、外国人教師1名
- ・学生：1年生3名、2年生13名（内社会人4名）

## (3) 体育科学研究科（博士課程：5年制）

- ・教育目標：人間の身体と運動およびスポーツ文化を物質的、生物学的、社会的レベルにおける研究分野で、自立して研究活動を行うに必要な高度な研究能力およびその基盤となる豊かな学識を養う。
- ・専攻：体育科学の1専攻のみだが、人文科学、健康スポーツ教育などの7系に大別されている。
- ・授業科目：体育心理学特講、体育心理学演習、体育心理学実験、スポーツカウンセリング論特講、スポーツカウンセリング論演習、スポーツカウンセリング論実験、スポーツ心理学特講、スポーツ心理学演習、スポーツ心理学研究法
- ・担当者：2名、外国人教師1名
- ・学生：1年生2名、3年生2名、5年生4名

## (4) 体育心理学研究室

研究生等を含めると総勢60名となり、大所帯である。定例の勉強会、研究会や、春、夏の合宿研究会も行われている。詳細は、体育心理学専門分科会会報「研究室めぐり（その3）」（1996, 8, 75-77）を参照。

## 2. 教育上の課題と改善（改悪？）への私見

- ・体育では「始めに種目・教材ありき」という考えが優先している。→ 「心身運動」として人間存在の意義を実感として認識する上で重要なものであり、これを教育の中心に位置づけるべきである。
- ・心理学の基本は自己認識の確立と人間関係の工夫にあるが、その実習・実体験の場が少ない。→ 人的交流の力が大きく、ネットワーク化への期待がある。接触距離、実時間で人間のライブ的交流が基本であるので、学会などで学生同士のナイトセッションを行う。
- ・運動を主体にしてきた学生、あるいは他領域卒業生が大学院で研究を進めるうえで、心理学の基礎力が不足している。→ 意識・生活様式の切替えと、基礎力を養成するために、1年間余分にかけただけの意気込みが欲しい。たまに補習的な自主講座を開いている。
- ・研究テーマは、学生自身の問題意識の掘り下げを重視するために多岐にわたる（指導教官の大枠内に納めるようにはしている）。→ 訓練期間ゆえ、研究室（教官）のテーマのサブテーマを遂行すべきである（？）。しかし、発想力、企画力がつきにくくなるだろう。
- ・多人数のため指導時間の調整が困難である。→ 一人10分以内で十分とする（？）。しかしお人よしで徹底できず、長時間になり、自分の時間がなくなる。
- ・日本の運動部的な指導者依存傾向がみられる。→ 知識、問題解決能力もさることながら、熱情と自分で考え抜く底力が必要である。それには大いにケンカすべきであり、バトルの場を設けている。
- ・心理学に対して親学問的発想、借り物意識がみられる。→ 親を踏み越えて運動面から発信する気迫が欲しい。
- ・文科系だからという発想が寂しい。→ 人間は文系、理系を含めた「文理両道」の存在である。運動はまさに複合的で、多面性・矛盾性こそ本質そのものである。

## 3. ネットワーク化への期待と限界

- ・距離と時間の制約の解消として、インターネットが利用（E-mail, Mailing-list, Home-page）できるので大いに推進すべきである。SCS（衛星通信大学間ネットワーク）もあるが、今後利便性の改善が望まれる。
- ・ネット化を推進すれば、各大学の総花的な画一化よりも、特徴を活かした個性化が図れる。すでに連携大学院が機能しており、EUでは統一体育修士コースが来年発足するようである。
- ・ただし、どこまでやるか、誰がやるか、というところで挫折してしまう事例には事欠かない。また、give & give の精神でないとやっていけない。結局、息の合う個人間での提携に留まる可能性もある。

## 私立総合大学における教養教育としてのスポーツ心理学の展開

慶応義塾大学 体育研究所 近藤 明彦

### 慶応義塾における保健体育・スポーツ関係の組織

慶応義塾には、保健体育・スポーツ等に関連する組織が幾つか点在する。大学付属研究所として、体育研究所（昭和 35 年 12 月、体育実技・体育理論・保健衛生の教養過程科目を設置）・スポーツ医学研究センター（平成元年 4 月、体育理論の兼任）、大学付属施設として、保健管理センター（昭和 47 年 4 月、保健衛生を兼任）がある。さらに、総合政策学部・環境情報学部付属心身ウェルネスセンター、学生総合センター、学生健康保険組合（トレーニングルームを設置）、体育会（各部並びに新種目団体・所属団体を公認）等もあり、会議等を通じての連携ならびに、授業等への兼任講師の派遣などの交流がなされている。

これらの組織の中で、特に筆者が所属する体育研究所の活動を中心に教養教育としてのスポーツ心理学の展開を概説する。

### 大学設置基準大綱化に伴う保健体育科目取り扱いの変化

それまで各学部には所属していた保健体育科目担当教員が集まり、昭和 35 年 12 月、体育学ならびに関連諸科学の研究および教育を行うことを目的として体育研究所が設置された。

教育・研究機関である体育研究所は、旧カリキュラムにおいては、文・経済・法・商・医・理工の各学部学生を対象にした体育実技 2 科目（各 1 単位）と体育理論・保健衛生（各 1 単位）の講義を担当してきた。大学設置基準の大綱化に伴い、慶応義塾でも平成 5 年度より新カリキュラムが開始され、保健体育科目は選択制となった。体育実技・体育理論・保健衛生それぞれ半期 1 単位であるが、学部によりその取り扱いが異なっており、卒業単位として認定される保健体育科目の上限単位数は、文・商は 4 単位、経済 6 単位、法学部法律学科 16 単位、法学部政治学科 24 単位となっている。理工学部は体育実技のみ 2 単位までを卒業単位としており、体育理論・保健衛生にかわって、総合教育科目の「人体の科学」を体育研究所が担当するという状況である。また、医学部は体育実技のみを自由科目（※卒業単位には合算されないが単位は認定される科目）として履修することが出来、他の学部も卒業認定単位を超える場合は自由科目としての履修となる。

体育理論は、旧カリキュラム時においては、保健衛生とセットにされ、それぞれ半期の 1/2 で 1 単位ずつ履修する状況であった。これが、選択制の新カリキュラム開始以降、前述の卒業単位として認定される単位の中で履修することが可能となった。但し、原則としては、同一科目重複履修が禁止されるため、体育理論を 2 科目履修しようとする場合は、1 科目を自由科目としなければならない。体育理論にサブタイトルを付けるに至る背景には、保健衛生・体育理論という講義課目履修者の激減と、従来ある面で画一的であった体育理論に対しての見直しの必要を迫られた結果であった。ここで議論された点は、学生の多種多様な興味・要求に対応するための講義内容の多様化であるが、結論的には体育理論をスポ

ーツ科学として取り扱い、教員の専門性を前面に打ち出した授業内容にしようというものであった。

このような背景のもとで、筆者は、自分の専門研究分野であるスポーツ心理学に焦点をあてた体育理論の講義を行うに至ったわけである。

### 慶応義塾におけるスポーツ心理学関連の授業の展開

以上のような状況の中、平成 6 年度には「スポーツの心理学的側面」というサブ・タイトルでスポーツ心理学の講義を 1 コマ開講した。また、「アスリートのためのスポーツ医・科学」のサブ・タイトルで、バイオメカニクス・スポーツ医学・スポーツ心理学を専門とする 3 名の教員によるオムニバス形式の講義を 1 コマ開講した。平成 7 年には「スポーツの心理学的側面」を「スポーツ心理学における俗説と真理」というサブタイトルに変更した。また、この年から平成 9 年まで「スポーツの社会学」としてオムニバス形式の一部としてスポーツ社会学的内容を実施した。さらに、平成 8 年よりスポーツ心理学を専門とする 2 名の期限付き専任教員の任用をうけ、「競技スポーツにおけるメンタルマネジメント」というサブタイトルでオムニバス形式の講義を展開した。現在、「スポーツ心理学における俗説と真理」と「競技スポーツにおけるメンタルマネジメント」並びに「アスリートのためのスポーツ医・科学」の 3 講義を開講している。

履修人数に関しては、選択制以降減少傾向は否めないものがあり、筆者の担当する科目の履修者数もそれぞれ 20 から 40 名程度という状況である。さらに、教職をとるために保健体育科目の履修が必要であるという学生も 1/5 から 1/3 程度含まれている。

### 慶応義塾におけるスポーツ心理学関連の活動

平成元年に設立されたスポーツ医学研究センターは、スポーツ医学に関する教育および研究を行い、競技水準の向上を図ると共に、スポーツによる事故および疾病の予防を行うことによって、慶応義塾のみならず我が国におけるスポーツ医学の発展とスポーツの振興に寄与することを目的としている。平成 5 年より文学部心理学科所属教員 2 名がスポーツ医学研究センター訪問研究員となり、体育会各部並びに神奈川県国体に向けてのメンタル面のサポート活動を続けている。

### 慶応義塾におけるスポーツ心理学関連活動の今後の可能性

慶応義塾では平成 9 年、教養教育の中心的役割を果たしている日吉キャンパスの基本構想が打ち出された。この中に、「日吉キャンパス研究センター（仮称）」の設置が提言され、学部を横断し、さらには各キャンパス・地域・社会との交流と協働を伴った形の研究・教育活動の重要性が提言されている。このような展開の中で、既存の活動、ならびに前述の保健体育・スポーツ関連諸機関との連携がますます活発になることが期待され、その中で、スポーツ心理学の重要性・必要性が認識されることが、今後の展開の鍵となると考えられる。



# 体育系大学（学部）における体育・スポーツ心理学関連領域のカリキュラムの実際と将来

荒木雅信（大阪体育大学）

体育系、体育・スポーツ心理学関連領域、カリキュラム

## はじめに

体育教師、そしてスポーツ指導者や選手の教育・養成に寄与するための、体育・スポーツ心理学の枠組みを提示し、当該領域での課題や将来を検討するために、現在、体育系大学（学部）で開講されている体育・スポーツ心理学関連領域の科目について、そのねらいや講義内容の調査を行なった。

（１）科目構成とそのねらい；理論から実践・応用への流れで、科目が構成されている。

《必修科目》は、体育心理学あるいはスポーツ心理学と称され、内容は従来からの概論的なものである。それに発育発達加わる場合があり、身心相関論が開講されている例は特記される。

《選択必修（専攻）科目》は、体育・スポーツ心理学の演習に加え、発育発達・運動学習・知覚・臨床・健康に関する講義と、研究法および実験に分類され、比較的幅広く用意されている。各大学で、専攻（あるいはコース）の特徴を出している。講義内容をみると、メンタルトレーニング関係のものが多く含まれている。

《選択科目》は、「スポーツ心理学における俗説と真理」といったユニークな科目も開講されているが、スポーツ競技へのアプローチとして、メンタルトレーニング関係の科目が開講されている。

（２）科目構成の将来展望；圧倒的に、メンタルトレーニングに関係する科目と、カウンセリング（面接・相談）に関係する科目の開講を希望している大学が多い。加えて、健康に関係した科目の開講を計画している例もある。ただ、具体的な授業内容（シラバス）の作成に至っていないことから、目的やニーズ、方法論などの検討課題が多い。

（３）メンタルトレーニングの位置づけ；大半が、スポーツにおける競技力の向上の一技法と位置づけている。ただ方法論上、心理的スキルなのか、面接・相談に代表される臨床心理学の技法にまで及ぶのか、議論の分かれるところである。他方、スポーツ場面のみならず、一般生活（健康）にまで適用の範囲を拡大して捉えられている点は、特記すべきだと思われる。さらにそのための人材確保は、先の科目構成の将来展望に関係してくる。

（４）スポーツカウンセリングの位置づけ；印象として、総体的に必要な性は認めるが、その具体的な内容になると明確な指針が提示できないというのが現状であろう。心理的サポートができる人材養成が体育・スポーツ心理学の問題かどうかを含めて検討が必要であり、仮に必要だとしても「基本がしっかりしていないといけない」といった意見もあった。授業内容も、臨床の実習や体験を行なう必要があり、現在の学部の授業の中では難しいが、大学院では可能性がある。

（５）体育・スポーツにおける臨床心理学の位置づけ；正に、枠組み作りが必要であり、そのための議論が大切と思われる。（ここで、臨床心理学とは、現実に即応したという程の意味である）

## 教育の流れと問題点

調査対象とした各大学の体育・スポーツ心理学関連領域のカリキュラムを概観すると、「こころ」と「動き」と「身体」のことを体系的に教育することをねらいとしているようである。しかし、スポーツ心理学関連の「資格」の問題が、従来の教育の流れと、どのように整合性をもっていくかが、問題となる。

## 実学を志向するのか

現状の学部教育では、理論的教育は可能だが、長時間にわたる指導現場での実習と、そのスーパーバイズを行なうことは不可能である。したがって、大学院レベルでの検討が現実的である。各大学院がそれぞれに特色ある教育・研究領域を持ち、そのデータベースを大学院間で共有することは可能であろう。大学院間での単位の互換は、すぐには実現できないので、特別講座の開講による資格関連の単位の認定や、研究所やトレーニングセンターなどでのインターンシップによる実習などのネットワーク作りが必要であらう。

体育・スポーツ心理学の教育における課題は、教育現場での成果や研究成果についての「こころと動きと身体」の知の体系化であり、これに基づくデータベースの作成が急務であらう。このことで、スポーツ心理学領域の教育の方向性が明示されると思われる。

（本調査は、平成9年度私学振興財団「特色ある教育研究の推進」事業特別補助により土屋裕睦と共同で行ない、下記の先生方にご協力を頂いた：敬称略）

阿江美恵子（東京女子体育大学）

栗木一博（仙台大学）

藤善尚憲（天理大学）

星野公夫（順天堂大学）

猪俣公宏（中京大学）

吉川政夫（東海大学）

児玉昌久（早稲田大学）

近藤明彦（慶応義塾大学）

楠本恭久（日本体育大学）

松井匡治（仙台大学）

中込四郎（筑波大学）

大西祥平（慶応義塾大学）

佐藤雅幸（専修大学）

園田順一（鹿屋体育大学）

杉山佳生（鹿屋体育大学）

山本勝昭（福岡大学）

山中 寛（鹿児島大学）



## 大学・大学院における「体育心理学」教育の課題およびネットワーク化

### ー独立大学院の立場からー

○ 石井 源信 (東京工業大学社会理工学研究科)

#### <はじめに>

東工大の保健体育においては体育・スポーツ心理学、運動生理学、バイオメカニクスを中心として理工系の特徴を生かしながら研究を進めてきた。また本学だからこそ価値ある重要な教科のひとつとして、思い入れをもって教育に専念してきた。ところが大綱化が打ち出されてきてから各大学にその運営が委ねられ、一般教育と専門教育の枠を越えた教育と組織づくりが一層要求され、それと同時に大学院重点化の波が押し寄せ、平成8年度から工学部（一般教育担当）所属から新設された大学院社会理工学研究科へ所属することになった。

#### <本学における保健体育の位置づけ>

##### 1) 一般教育としての健康・スポーツ科目

保健体育科目から健康・スポーツ科目へと名称を変更（運営は実施委員会）し、健康科学の講義とスポーツ実習を開講している。講義は平成9年度までの2単位が10年度から1単位になった。実習に関しては、通年1単位カウントで2年間2単位のものが、平成5年度から半期1単位で1年半3単位となり、健康・スポーツ科目の必須単位4単位が5単位（実質的には減少）となった。さらに平成10年度から実習2単位と講義1単位を合わせて計3単位に縮小した。ただし、必須から外れた2単位は卒業要件に入れる方向で努力をしつつ、選択授業としてユニークな授業を検討中である。

##### 2) 専門教育としての保健体育

大学院重点化と関連して、学部の高学年を対象とした「スポーツ科学」という心理学、生理学の実験・演習を含んだ講義を機械系、制御系推奨の専門科目として平成7年度から開講し、大学院進学への足掛かりとしている。

##### 3) 独立大学院での保健体育の位置づけ

平成8年度に社会理工学研究科が科学技術（理系）と人間社会（文系）の双方の分野を視界に入れた新しい学問間しかもきわめて実践的な意志決定に重心をおいた学問領域として設立された。この研究科は人間行動システム専攻、価値システム専攻、経営工学専攻、社会工学専攻の4つの専攻からなり、我々が所属する人間行動システム専攻は旧一般教育群（保健体育、教育、外国語の一部）を中心として教育工学開発センター及び外部機関（大学入試センター）の協力で設立された。

#### <人間行動システム専攻の概要>

本専攻は、行動システム講座と人間開発科学講座の2

つの基幹講座（大講座）と1つの協力講座（教育工学）からなっている。その理念は以下のようである。

「人間性を加味した新しい科学技術の発展に寄与するため人間の知性、認識、社会性、コミュニケーション、生体や行動などの特性を解明し、人間の能力開発の基礎となる理論体系を構築する。また、その理論体系に基づき、人間とさまざまなメディアや機器との効果を解明し、人間に優しく、人間の能力を引き出しかつ拡大する新しいメディアや機器の開発に貢献することをめざす。」

我々が所属する行動システム講座は3分野（従来の小講座相当）1講座の大講座制をとっており、特に保健体育に関連する2つの分野について紹介する。ちなみにもう1つは「言語行為分野」である。

##### 1) 身心相関分野

運動・スポーツやトレーニングの心理的及び生理的効果に関する研究、各領域で能力を最大限に発揮するための心理的適性の診断と処方、相談システムの開発、対人行動や人間関係技術等の集団への適応に関する研究、また生体内部環境制御システムである内分泌系メカニズムに関する研究を行う。

##### 2) 生体動態分野

健康維持増進を追求するために、加齢減少に伴う骨密度、心機能とストレスとの関係、介護のための健康器具開発並びに健康開発システムに関する研究、また、生体情報、バイオメカニクス、生理学的研究法を用いて動作の最適化、動作学習及び適応に関する研究を行う。

#### <大学院の現状と今後の方向性>

1) 本学の理工・生命系の学生、他大学より入学の学生（人文系、体育系、教育系）との多様なメンバー構成の中で保健体育という枠を越えた教育研究をめざしている。この専攻でどんな人材を養成し、どのような領域に就職させることができるか模索しているところである。

2) 大学院に所属しながら学部教育（健康・スポーツ科目、スポーツ科学）を運営する必要がある。今後教官に関しては、身心相関分野では体育人であり、スポーツ心理学領域を担当できる人材を望むところである。

4) 専攻の学生定員は修士24名、博士11名である。身心相関分野では心理系（東工大、筑波大、東京女子大、横浜国大、金沢大、東京理科大、早大）生化学系（東工大、都立大、東京商船大）現在修士6名、博士6名（社会人4名）系12名が研究に励んでいる。

## V. 事務局報告

日時 平成9年10月8日（水）11：10～12：00

場所：新潟大学 教養校舎255

## 体育心理学専門分科会総会式次第

1. 開会の辞
2. 議長の選出
3. 報 告
  - 1) 平成9年度事業活動報告
  - 2) その他
4. 審 議
  - 1) 平成9年度決算及び平成10年度予算案について＜資料1＞
  - 2) 平成10年度の事業計画について＜資料2＞
    - （1）日本体育学会第49回大会について
    - （2）体育心理学専門分科会会報第10号（通巻38号）の発行について
  - 3) 日本体育学会第50回記念大会について
  - 4) その他
5. 閉会の辞

# 1. 平成9年度事業報告（平成8年度学会終了時～平成9年度学会終了時まで）

## 1) 日本体育学会体育心理学専門分科会関係

### （1）キーノート・レクチャー

期 日：平成9年10月7日（火）（於：新潟大学 教養校舎271）

時 間：13:00～14:00

テーマ：随意運動に先行する脳の緩電位変動と心理要因

演 者：正木宏明（早稲田大学人間科学部）

司 会：佐久間春夫（奈良女子大学）

### （2）シンポジウム

期 日：平成9年10月8日（水）（於：新潟大学）

時間・場所：9:00～11:00（120分）（教養校舎255）

テーマ：運動部における体育心理学領域からの諸問題及び研究課題

演 者：皆木 香（新潟市立小新中学校）

桂 和仁（武蔵丘短期大学）

阿江 美恵子（東京女子体育大学）

司 会：中込四郎（筑波大学）

### （3）一般発表

口頭発表：平成9年10月7日（火）および9日（木）

ポスター発表：平成9年10月7日（火）および9日（木）

発表数：平成9年度52題（口頭発表31題；ポスター発表21題）

（備考：平成6年55題；平成7年50題；平成8年度47題）

### （4）総 会

期 日：平成9年10月8日（水）

時間・場所：11:10から12:00，教養校舎255

## 2) 体育心理学専門分科会会報の発行

会報第9号（通巻第37号）を8月26日付で発行した。全会員（640名）および他専門分科会事

務局（12部）に郵送した。

### 3) その他の事務局業務

事務局業務として、次の事項を遂行した。

(1) 第48回日本体育学会専門分科会連絡会議出席

(2) 日本体育学会学会賞選考委員の選出

(3) 専門分科会に関わる確認事項の調査および解答

平成10年度の事業計画に関する意見を調査する旨を、各運営委員宛に平成9年7月30日付で発送した。この調査結果は本会報の「IV. 事務局報告」にまとめられている。

(4) キーノートレクチャーおよびシンポジウムの講師・演者への依頼

第48回大会のキーノートレクチャーおよび講師・演者、司会を選定し、併せて大会号のための抄録の準備について依頼した。

(5) 専門分科会連絡会議（第3回）および支部長・専門分科会世話人合同会議への出席

(6) キーノートレクチャーおよびシンポジウム演者の抄録提出依頼

大会号の抄録原稿は事務局で取りまとめて、当番大学に送付する旨を通知および依頼した。

(7) 体育心理学専門分科会のキーノートレクチャーおよびシンポジウム大会号原稿の送付

関連する大会号原稿を一括して事務局より当番校（新潟大学）へ送付した。また、各演者、司会者へも送付した。

(8) 日本体育学会一般発表プログラムの作成及び座長の推薦

発表数52（口頭発表：31題；ポスター発表：22題）のプログラム作成と座長の推薦を当番大学に報告した。

(9) 平成10年度体育心理学専門分科会の事業計画についての意見調査

運営委員の21名に対して、平成10年度の体育学会時のキーノートレクチャー、シンポジウム、プレ・セミナー、会報の発行等に関する意見調査を平成9年7月30日付で依頼した。

(10) 体育心理学専門分科会会報の送付

会報第9号（通巻第37号）と平成9年度専門分科会の企画、総会式次第などを全会員に8月26日付で送付した。

(11) 名誉会員の推薦

日本体育学会理事長より名誉会員推薦のための資料提出があったので、関係者に連絡後、太田鐵男氏および山下美登里氏の資料を平成9年2月10日付で送付した。

#### (12) 会報原稿の依頼

会報第10号の原稿として体育学会の講師・座長等へ原稿を依頼した。

### 4) 速報

#### (1) 日本体育学会体育心理学専門分科会選出の評議員選挙

平成10年3月17日付で体育心理学専門分科会選出の評議員の選挙を行った。締切りの4月17日の後に開票した結果、次の22名を選出し、日本体育学会選挙管理委員会に報告した。任期は平成10年4月1日～平成13年3月31日まで。なお、投票率は13.75%の低率だった。

|           |           |           |            |
|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 阿江 美恵子 | 7. 落合 優   | 13. 竹中 晃二 | 19. 藤田 厚   |
| 2. 荒木 雅信  | 8. 加賀 秀夫  | 14. 調枝 孝治 | 20. 山本 勝昭  |
| 3. 石井 源信  | 9. 海野 孝   | 15. 徳永 幹雄 | 21. 吉田 茂   |
| 4. 伊藤 政展  | 10. 工藤 孝幾 | 16. 中込 四郎 | 22. 吉本 俊明  |
| 5. 市村 操一  | 11. 近藤 充夫 | 17. 橋本 公雄 | (五十音順、敬称略) |
| 6. 猪俣 公宏  | 12. 杉原 隆  | 18. 船越 正康 |            |

#### (2) 体育心理学専門分科会会長の選出

平成7年度の体育心理学専門分科会の総会において分科会会則が承認された。これにより会長を選出することになった。規定に基づき、運営委員（日本体育学会体育心理学専門分科会選出の評議員22名）の互選により会長を選出した。平成10年6月10日付で投票依頼を行い、開票の結果、次のとおりであった。

|      |    |      |    |      |    |      |    |
|------|----|------|----|------|----|------|----|
| 徳永幹雄 | 8票 | 近藤充夫 | 2票 | 市村操一 | 1票 | 猪俣公宏 | 1票 |
| 杉原隆  | 1票 | 調枝孝治 | 1票 | 中込四郎 | 1票 |      |    |

この結果、平成10年度総会に徳永氏を会長として、承認して頂く議題を提出することになった。



## 2. 議 題（提案内容）

### 1) 平成10年度の事業計画について

#### (1) 日本体育学会第49回大会関係

(a) キーノート・レクチャーの開催

(b) シンポジウムの開催

(c) ポスター発表の設置

#### (2) 体育心理学専門分科会会報第9号（通巻37号）の発行

### 2) 平成9年度決算及び平成10年度予算案について（別紙資料参照のこと）

### 3) その他

(1) 日本体育学会第50回記念大会について（専門分科会長・徳永幹雄氏から説明，および意見収集）

(2) 一般研究発表の申込における大会発表コード表の見直しについて

(3) 学会発表期間中における口頭発表とポスター発表の重複の改善について

## 平成10年度日本体育学会体育心理学専門分科会の活動について

本専門分科会の理事の先生方へのアンケートより、以下のようなご意見が寄せられました。

### 1. キーノート・レクチャーのテーマおよび講師

| テーマ                        | 講師                           |
|----------------------------|------------------------------|
| 運動と心の健康                    | 日本健康心理学会または日本ストレス学会等の著名な心理学者 |
| 運動の継続に関するテーマ               |                              |
| 運動プログラムの表現形式をどう測定するか       | 伊藤 政展                        |
| 運動の有能感と発達                  | 西田 保                         |
| スポーツ心理学における理論的研究と実践の関係について | 調枝 孝治, 船越 正康<br>徳永 幹雄, 田 一成  |
|                            | 勝部 篤美                        |

### 2. シンポジウムのテーマおよび講師

| テーマ                                        | 講師                                       |
|--------------------------------------------|------------------------------------------|
| 観戦スポーツの心理                                  | 他分野からの登壇を求め、充実させる                        |
| スポーツとバイオレンスの心理                             |                                          |
| スポーツと美意識の科学                                |                                          |
| 運動は心の健康に貢献できるか                             |                                          |
| 21世紀における体育心理学の貢献（あるいは存在意義）                 | 生理心理、学習、発達、パーソナリティ、社会心理、臨床心理に関係した代表的研究者  |
| 選手が望む心理的サポートと、研究者が教える心理的サポートについて（司会：岡沢 祥訓） | 心理的サポートを受けた経験のある引退直後の選手、心理的サポートを教えている研究者 |
| 運動の継続化をめぐる                                 | 山口 幸雄                                    |
| 知覚・運動学習の多重安定性（司会：調枝 孝治）                    | 今中 国泰, 兄井 彰<br>工藤 和俊                     |
| 運動技能のシュミレーショントレーニングの効果                     | 情報処理関係の専門家、スポーツ心理学の専門家、コーチ               |
| スポーツファン、とくに、いわゆるサポーターの心理について（司会：丹羽 劭昭）     | 加藤 久, 仲沢 真<br>山崎 勝男                      |

### 3. プレ・セミナーへのご意見・ご要望

- 会期中の夜の部としてセッティングできないか。
- 学会時が無理ならば、夏、春に企画する（これも忙しいので学会時が適切かも）。
- 毎年は大変なので、隔年ごととか、議論が必要な事項やテーマであればその都度開催する（しかし、懇親会は毎年あってよい）
- 若手研究者に刺激を与えるような方向で企画する。海外の情報・動向、斬新な研究、あるいは研究方法など。
- 発表者に対する評価が必要。評価者をお願いするか、会報の紙面で評価してもらう。
- 選手や、スポーツ実施者ではない多数の人々がスポーツ競技に興味を寄せ、自我関与や同一化の度も浅からぬことについて、考え、調べ、検討すべき時期にきている。

### 4. 会報の発行について

- パターン化（支部活動、大会発表、研究会紹介）と即時性（学会賞、優秀研究）とのバランスをとる。
- 現状維持・事務局のアイデア。
- 若手研究者を多く登用する。
- 原稿の長さが短く、研究内容について記述が少ないので、少し長く書いていただくようにしてはどうか。

### 5. その他

- 学会時に体育心理学専門分科会の懇親会があると良い。
- 日本スポーツ心理学会と同様に年1，2回理事会を開き、理事の役割を決め、積極的行動を推進する。
- 現在の（会費）1000円は他の分科会に比較し、安すぎる。
- これまでの研究成果のまとめと今後の方向性について、体系的な視点から「知の体系化」の作業の準備をはじめめる必要がある。5年とか、10年とか長い事業計画の中で進めていくものである。腰を据えた共同研究が必要な時期だと思う。こういう大がかりな仕事は、個人では難しいので学会レベルで進めてほしい。
- 運営委員の仕事として「これはして頂く」というものを講じては？
- 一般発表、シンポジウム、キーノート以外にもミニ・シンポ等をふやして、各会員の考えている、やっていることに近い内容のものが開かれるようにする。曖昧な発表、聴衆が減るのでは？しかし、学会の上層部の決断を要する。
- 体育心理学専門分科会とスポーツ心理学会の活動に重なりが生じないように、体育心理学専門分科会としての独自性を発揮していただきたい。

## 専門分科会の会員が中心となって活動している 研究会（グループ）の紹介

専門分科会の理事の先生方より，分科会会員が中心となって活動している研究会についての情報もあわせてお寄せいただきましたので，ご紹介いたします。

| 研究会名                   | 代表者         |
|------------------------|-------------|
| 運動学習研究会                | 麓 信義        |
| 大阪心理技術研究所              | 柏原 健三・船越 正康 |
| 関西地区体育心理例会             | 船越 正康       |
| 九州スポーツ心理学会             | 山本 勝昭       |
| メンタルトレーニング・応用スポーツ心理研究会 | 高妻 容一       |
| 臨床スポーツ心理研究会            | 星野 公夫・中込 四郎 |

※ 事務局では，学外者の参加があり，定期的に（年一回でも可）活動している研究会の状況を把握したいと考えております。ご存じの研究会がありましたら，研究会名，代表者，会員数，活動拠点などの情報をお知らせください。

## 平成 9 年度決算（平成 8 年 9 月 2 6 日～平成 9 年度総会まで）

| 収入の部                                                | 平成 9 年度予算案 | 平成 9 年度決算                |
|-----------------------------------------------------|------------|--------------------------|
| 前年度繰越金                                              | 922,255    | 922,255                  |
| 年度会費                                                | 600,000    | 628,500                  |
| シンポジストより返金                                          | 0          | 10,000                   |
| 郵便貯金（利息）                                            | 0          | 1                        |
| 体育学会専門分科会補助                                         | 125,000    | 127,000                  |
| 収入合計                                                | 1,647,255  | 1,687,756                |
| 支出の部                                                |            |                          |
| ・ 会報関連費用                                            |            |                          |
| 印刷費                                                 | 200,000    | (△) 220,500              |
| 郵送費                                                 | 200,000    | 151,290                  |
| ・ シンポジウム等関連経費<br>プレ・セミナー,<br>体育学会等講師,<br>会報原稿協力者等謝礼 | 250,000    | 95,000                   |
| ・ ポスター発表負担金                                         | 0          | (千葉・体育学会)<br>(△) 105,548 |
| ・ 事務局事務費<br>文具・コピー等関連<br>封筒印刷費                      | 200,000    | 151,198                  |
| ・ 通信費<br>シンポジウム等連絡費                                 | 150,000    | 12,570                   |
| ・ 予備費                                               | 647,255    |                          |
| 支出合計                                                | 1,647,255  | 735,606                  |
| 次年度繰越金                                              |            | 952,150                  |

## 平成10年度予算案（平成9年度総会～平成10年度総会まで）

| 収入の部                                                | 平成9年度決算              | 平成10年度予算案 |
|-----------------------------------------------------|----------------------|-----------|
| 前年度繰越金                                              | 922,255              | 952,150   |
| 年度会費                                                | 628,500              | 600,000   |
| シンポジストより返金                                          | 10,000               | 0         |
| 郵便貯金（利息）                                            | 1                    | 0         |
| 体育学会分科会補助費                                          | 127,000              | 120,000   |
| 収入合計                                                | 1,687,756            | 1,672,150 |
| 支出の部                                                |                      |           |
| ・ 会報関連費                                             |                      |           |
| 印刷費                                                 | 220,500              | 250,000   |
| 郵送費                                                 | 151,290              | 200,000   |
| ・ シンポジウム等関連経費<br>プレ・セミナー,<br>体育学会等講師,<br>会報原稿協力者等謝礼 | 95,000               | 200,000   |
| ・ ポスター発表負担金                                         | 105,548              | 100,000   |
| ・ 事務局事務費<br>文具・コピー等関連<br>封筒印刷費                      | (千葉・体育学会)<br>151,198 | 150,000   |
| ・ 通信費                                               | 12,570               | 150,000   |
| 支出合計                                                | 735,606              | 1,050,000 |
| ・ 次年度繰越金                                            | 952,150              |           |
| ・ 10年度予備費                                           |                      | 622,150   |
| 合計                                                  | 1,687,756            | 1,672,150 |



## 編集後記

会報10号（通巻38号）を会員の皆さまにお送りいたします。特別寄稿、その他ご協力いただきました先生方には感謝申し上げます。

来年は体育学会が設立されて50年という区切りの年になります。次号では、学会活動に比較的初期から加わっておられた先生方から語っていただくかと計画しております。その際にはご協力お願いいたします。

10月に予定されています体育学会（愛媛大学）において、会員の皆さまと有意義な研究交流ができることを楽しみにいたしております。学会大会事務局の関係者のご苦勞に、この場を借りてお礼申し上げます。

平成10年 8 月

日本体育学会体育心理学専門分科会会報 第10号（通巻38号）

---

|       |                                                                                      |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 発 行   | 平成10年 8 月17日 発行（非売品）                                                                 |
| 発行責任者 | 中込四郎（代表）                                                                             |
| 発行所   | 日本体育学会体育心理学専門分科会事務局<br>〒305-8574 つくば市天王台1-1-1<br>筑波大学体育科学系 中込研究室内<br>電話 0298-53-2686 |
| 印刷    | 前田印刷株式会社 筑波支店<br>〒305-0033 つくば市東新井14-3<br>電話 0298-51-6911                            |

---